

日本初

アートハイクおきなわ

又吉康隆

沖縄は亜熱帯地域である。本土のように四季ははっきりしていない。

季語にこだわっているのは沖縄では俳句を作るのが困難である。

だから、季語には固執しないで俳句をつくった。

アドビーフォトデラックスで写真を抽象画のようにすることができるようになった。

写真、抽象画と俳句をドッキングさせた。

この本を出版するに当たって、俳句をカタカナのハイクにした。

俳句には季語を入れなければならない。

季語の入らない作品が多いので俳句とするのはおこがましい。

だからハイクにした。

アートとハイクをドッキングするということ

アートハイクとした。

青空の
下で
踊れや
踊れ
夏





ゆつたりと

過ぎ去る時に

もたれつつ



音は消え

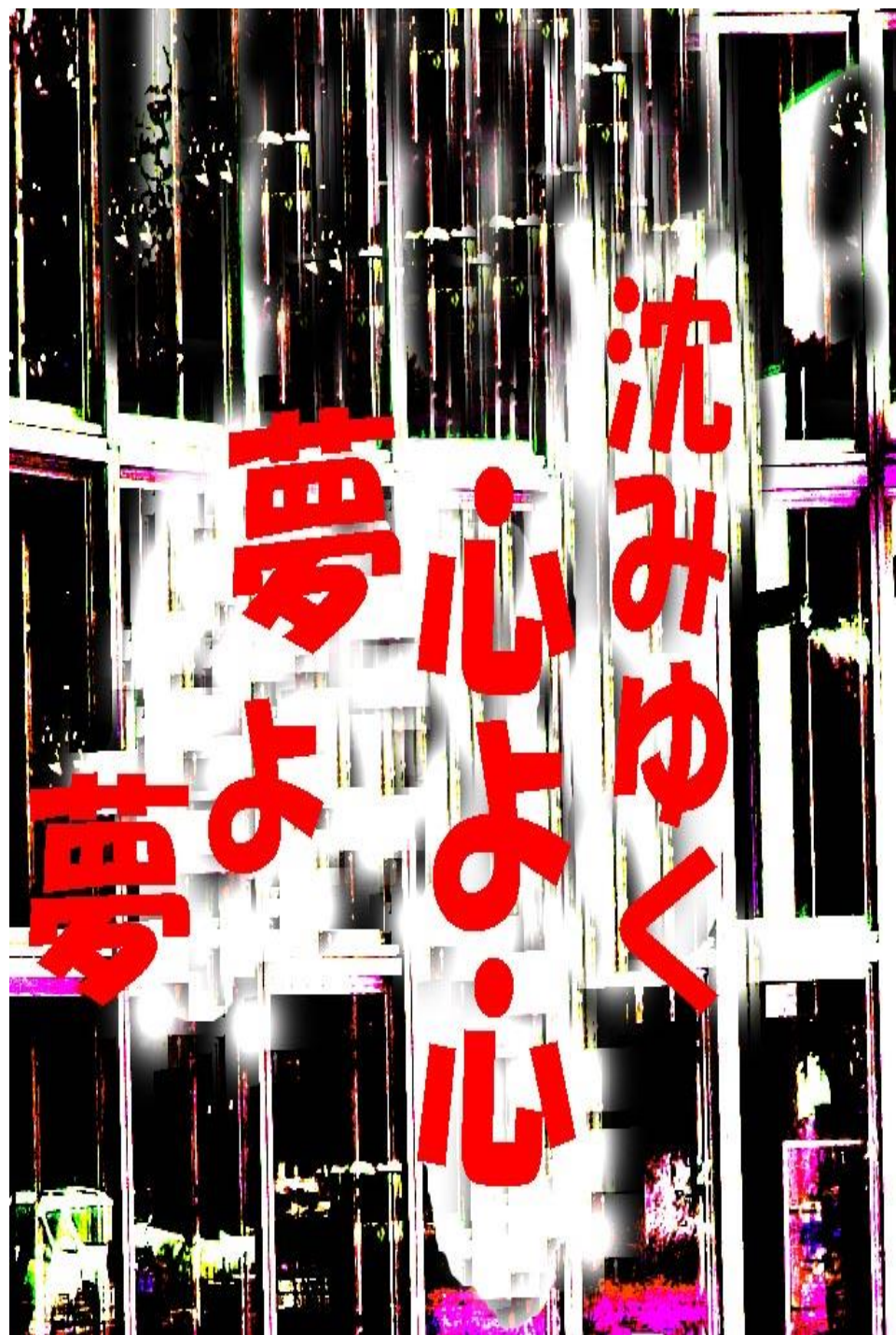
心

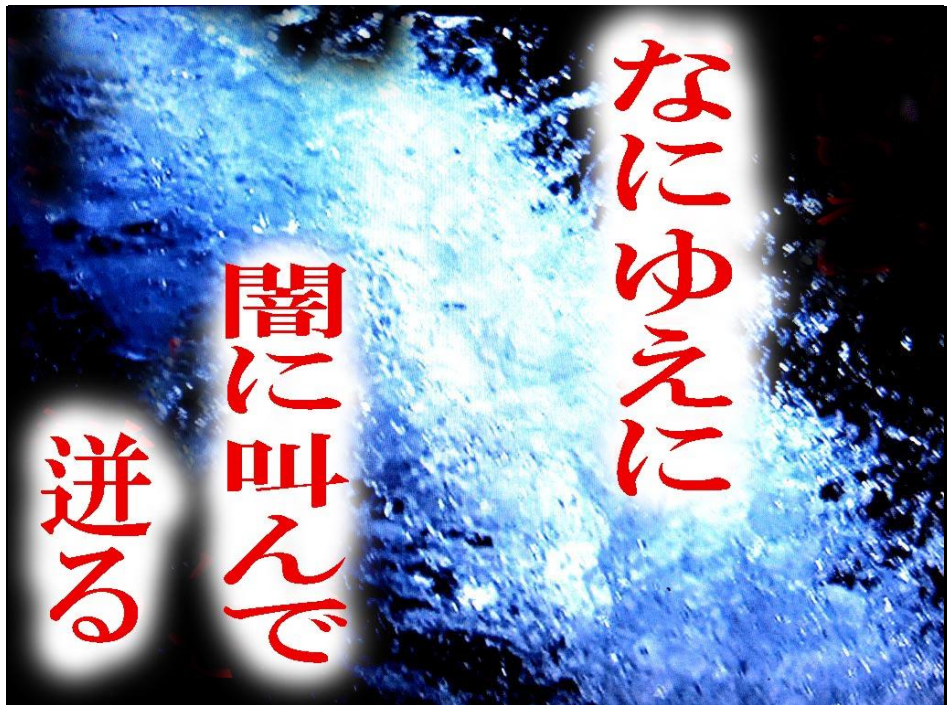
澄みゆく

雨上がり









なにゆえに

闇に叫んで

迸る

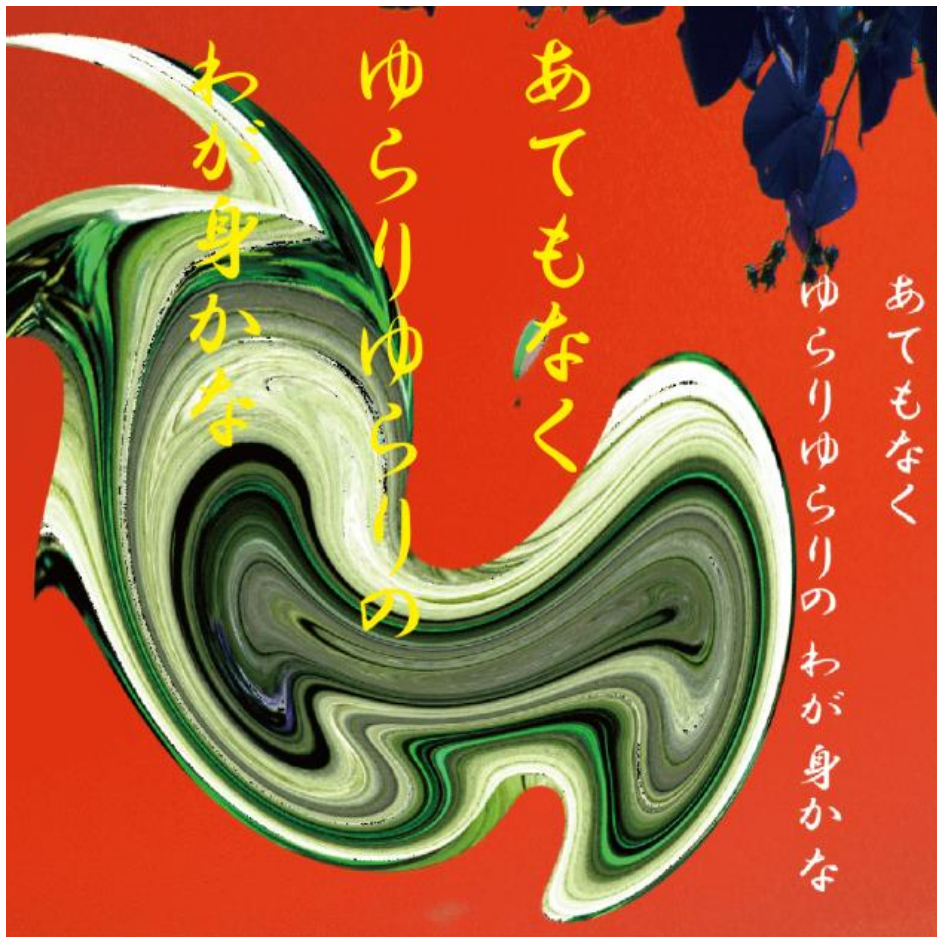


貝がらを

探して浜に

春の風







けだかくも
寂しく空の
はぐれ鷹





熟れていくおまえを愛し

酒の日々

ああ女

闇で微笑む

狂おしく







赤土が
積み上げられて
空と雲



暴風と
暑さに疲れ
晩夏かな



岩がある
潮風が吹く
ふたり立つ





しがらみの
向こうもまた
しがらみか

あばら家の
ひさしに雨滴
乱れ落ち





ただひとり

春を

拒否

して

枯れて

ゆく

まぼろしの

きみをながめる

あきのさけ

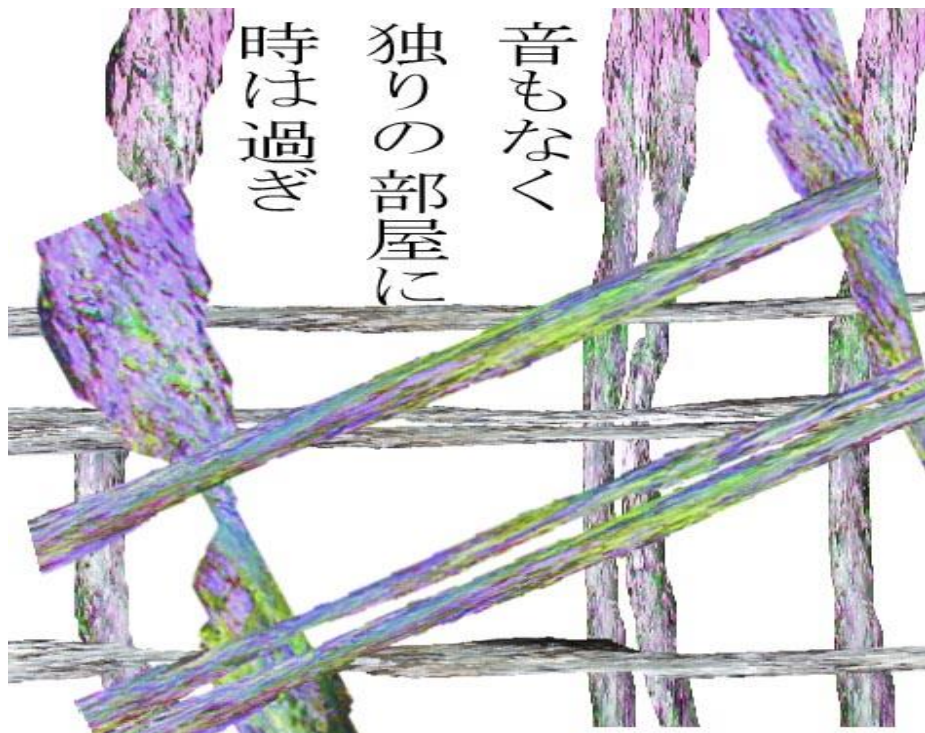
ゆらゆら

と

悩み泳いで

浮世はなほ





音もなく

独りの部屋に

時は過ぎ



酔いどれて

なにを求めて

彷徨うか



海原を

行ったり来たり

だけのへり



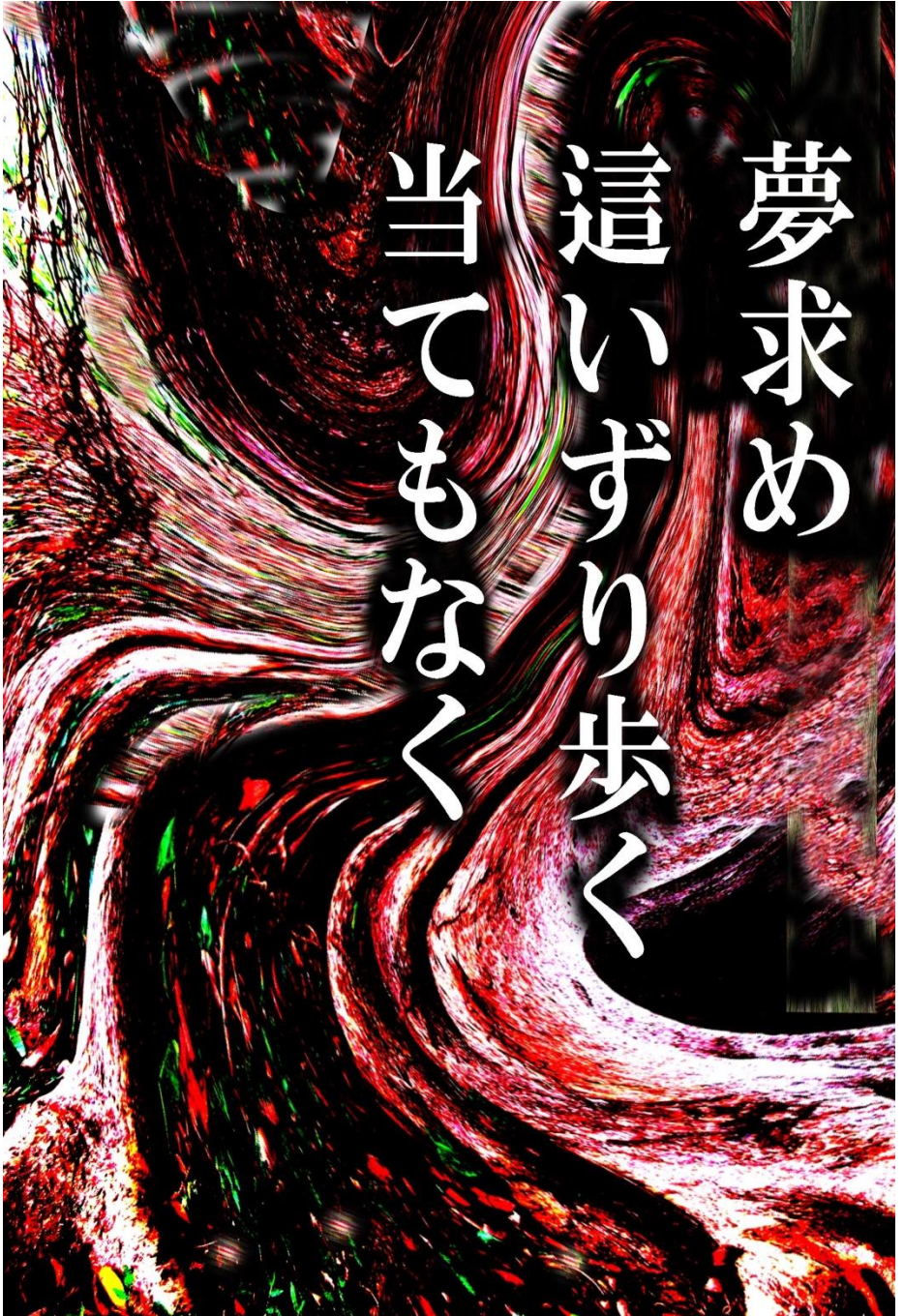
岩に
生きる
秋の
にが菜の
花一輪



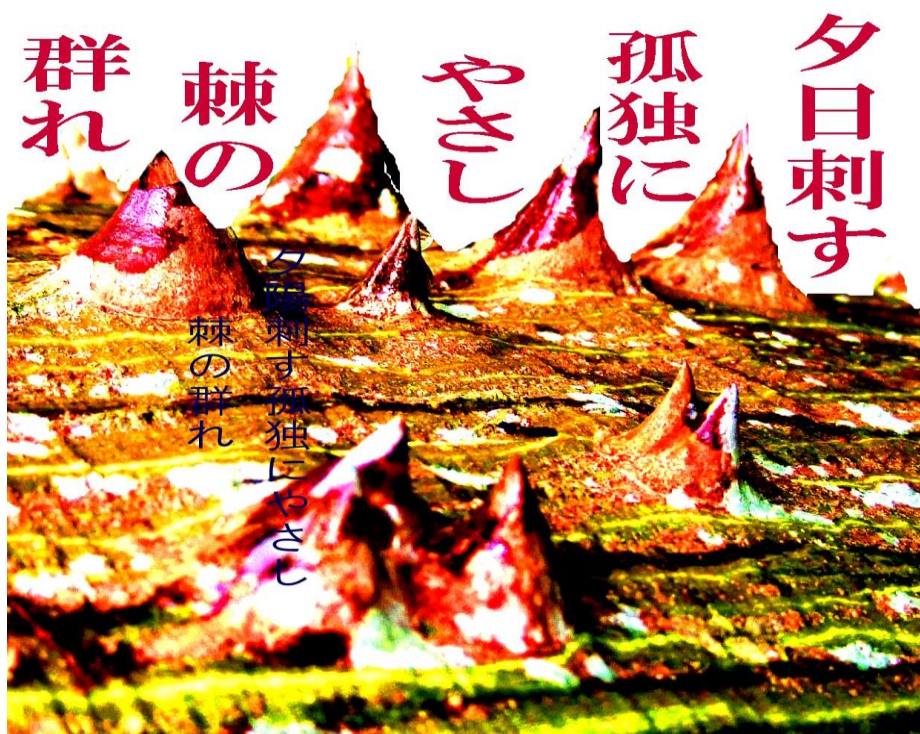
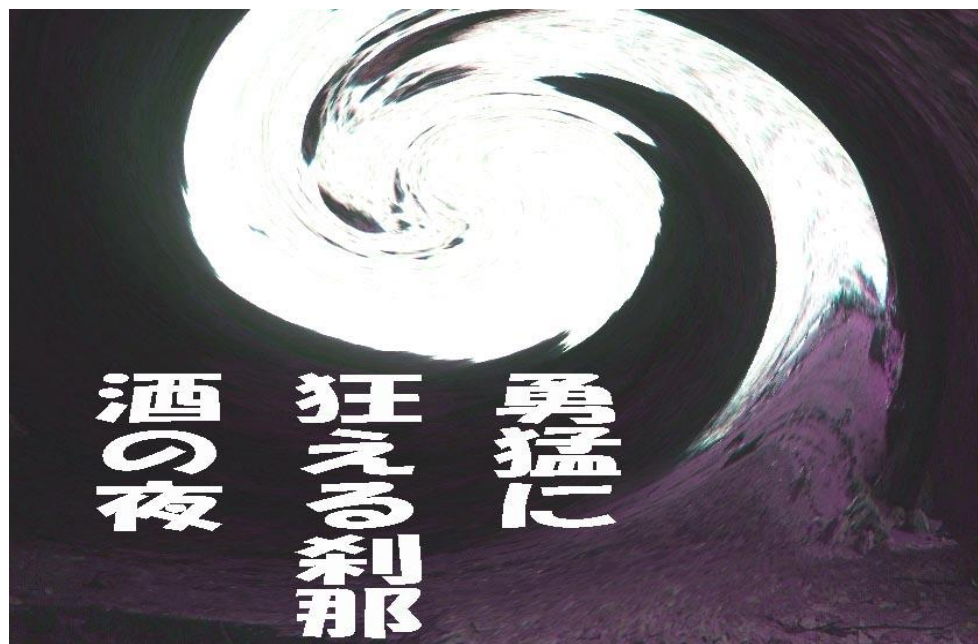
潮風と
戯れ揺れる
浜の花







夢求め
這いずり歩く
当てもなく





カニステル

陸み抱かれ

緑葉と



こらしよ

ひょーいひょーい

あてもなく

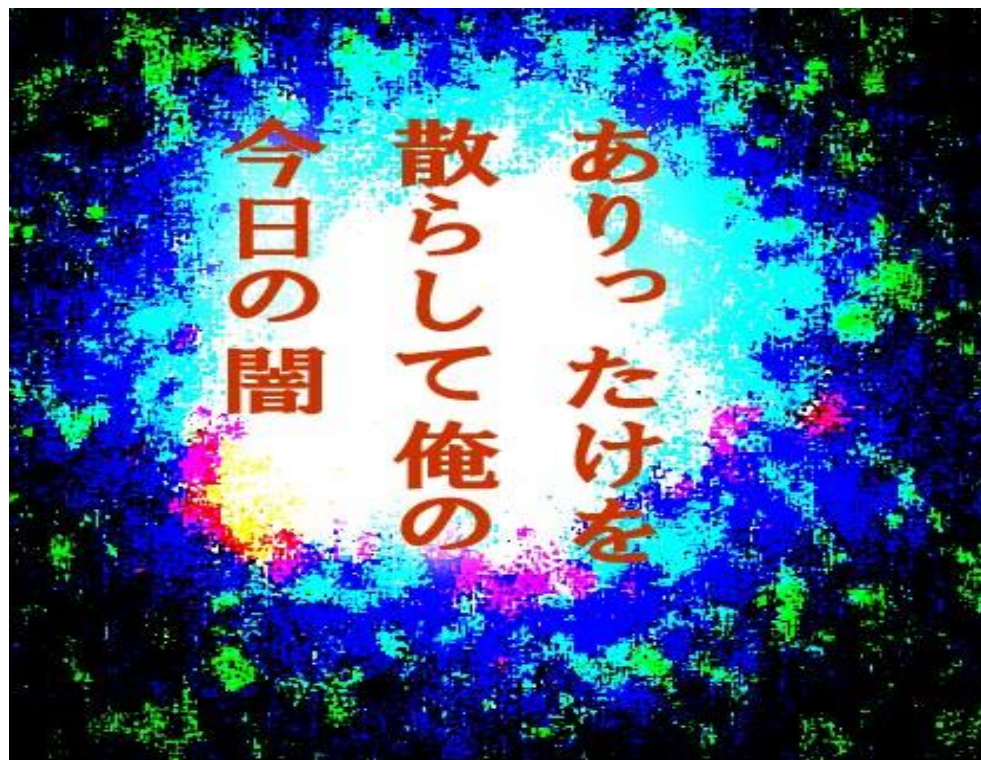
居場所もなく

つんつんてん

けんけんけん

けんぽー

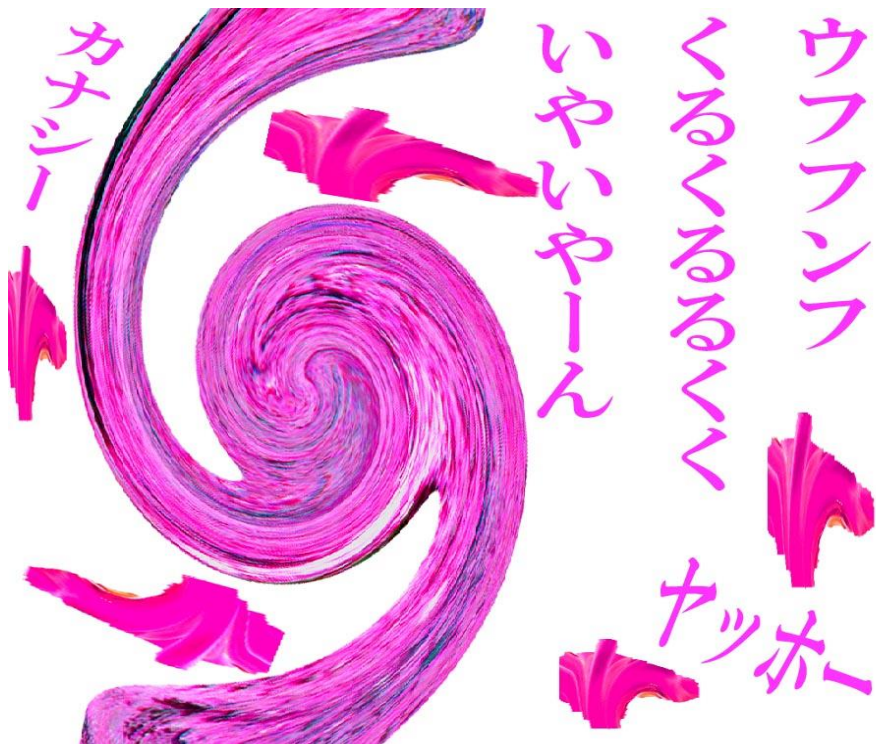
くーちよき



ありつ たけを
散らして俺の
今日の闇



うぐいすと
ひよどりの声が
どこからか





カラスがガ
ー

木が
笑
して

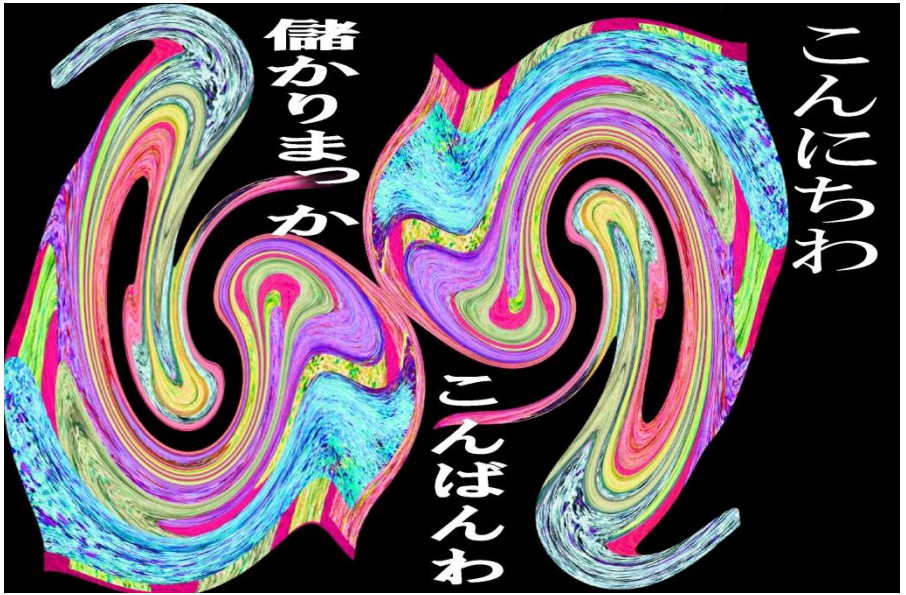
日
が
暮
れ
る




き
び
よ

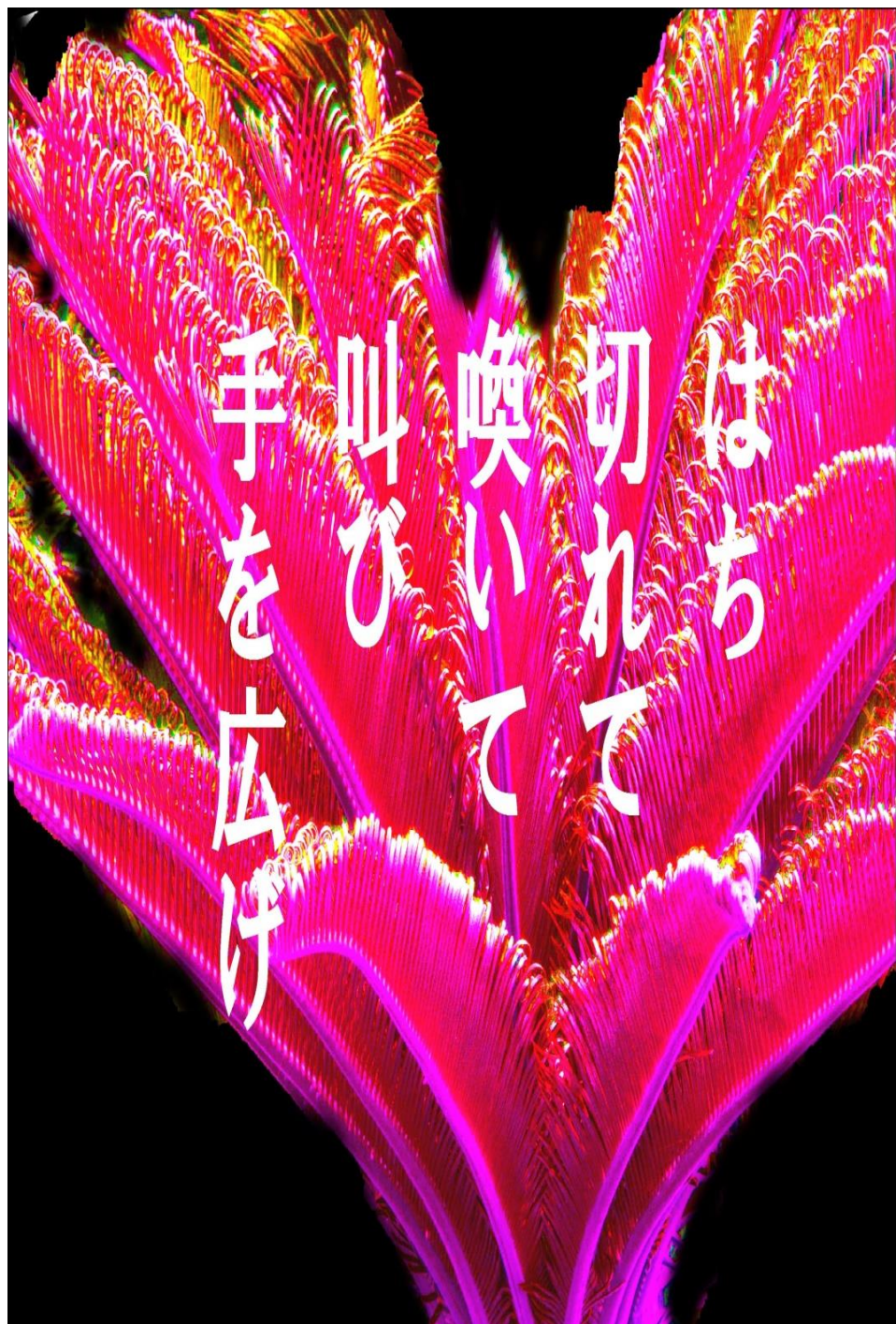
育
て
育
て
と

少
年
の
日
々





せつなくて
あてなく歩く
なあ月よ



は 切 喚 叫
ち れ い び
て て
手
を
広
げ



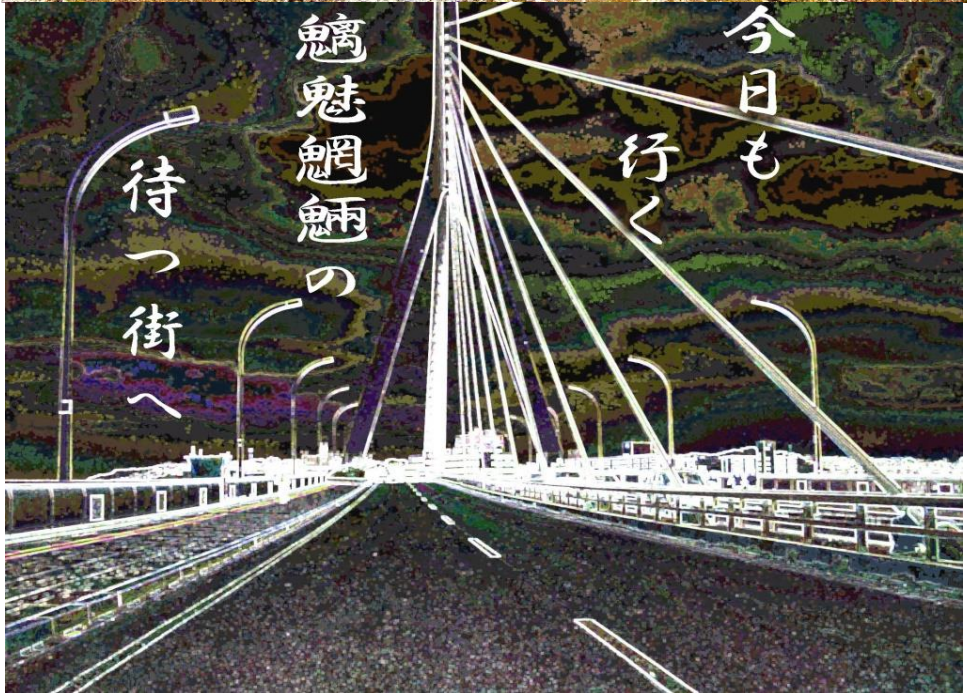
無垢な花

やわらかな陽に恥らうや



今日も雨

ゆらゆら脳が憂鬱





嵐来て

裸にされた

パイアよ

生きる

生きる



暴風に

なぎ倒されて

秋が過ぎ



我の実を

愛しみ生きる

バナナかな



赤い花

あけてゆく
独りの夜に



きみ
想う
さびしく
独り

春の
酒

おまえと

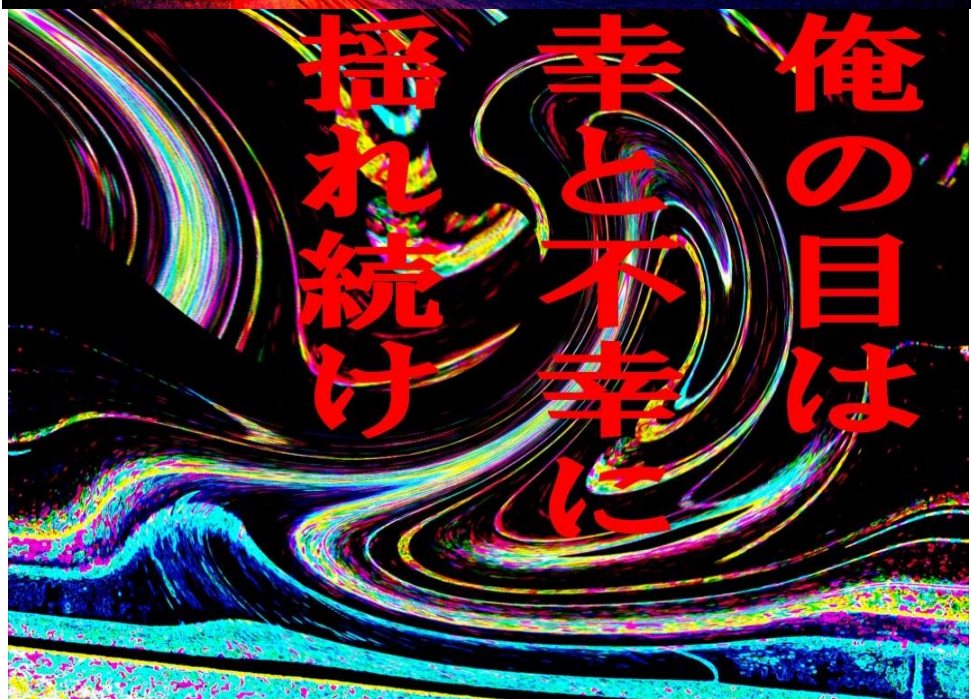
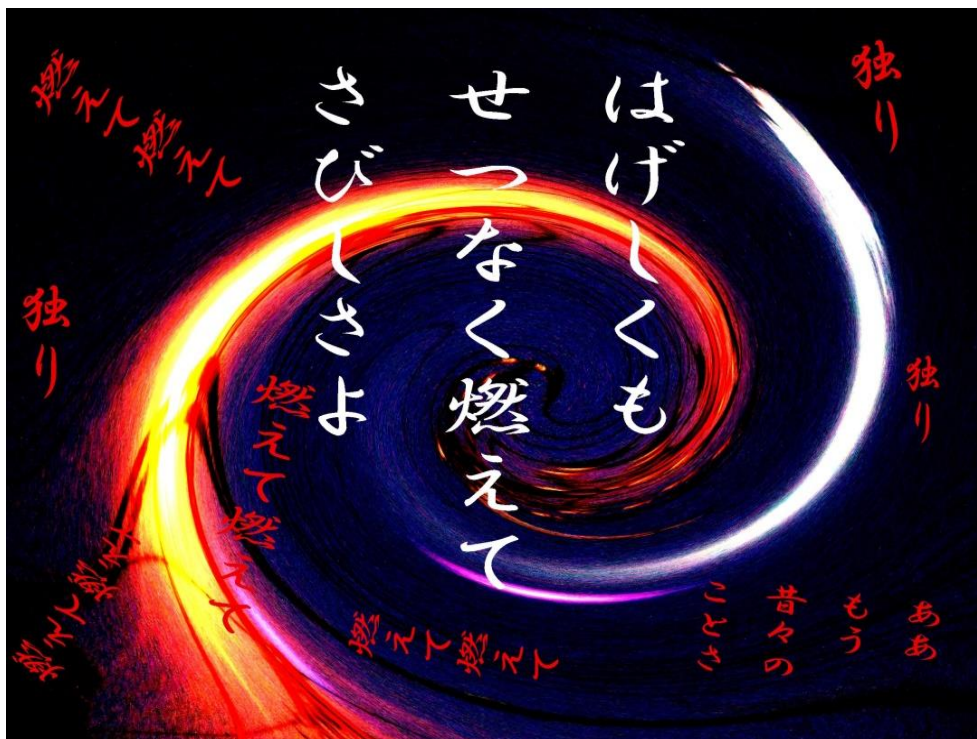
野を

行き

微笑みも

遠い日








シーサーよ
俺を睨むのは
やめてくれ



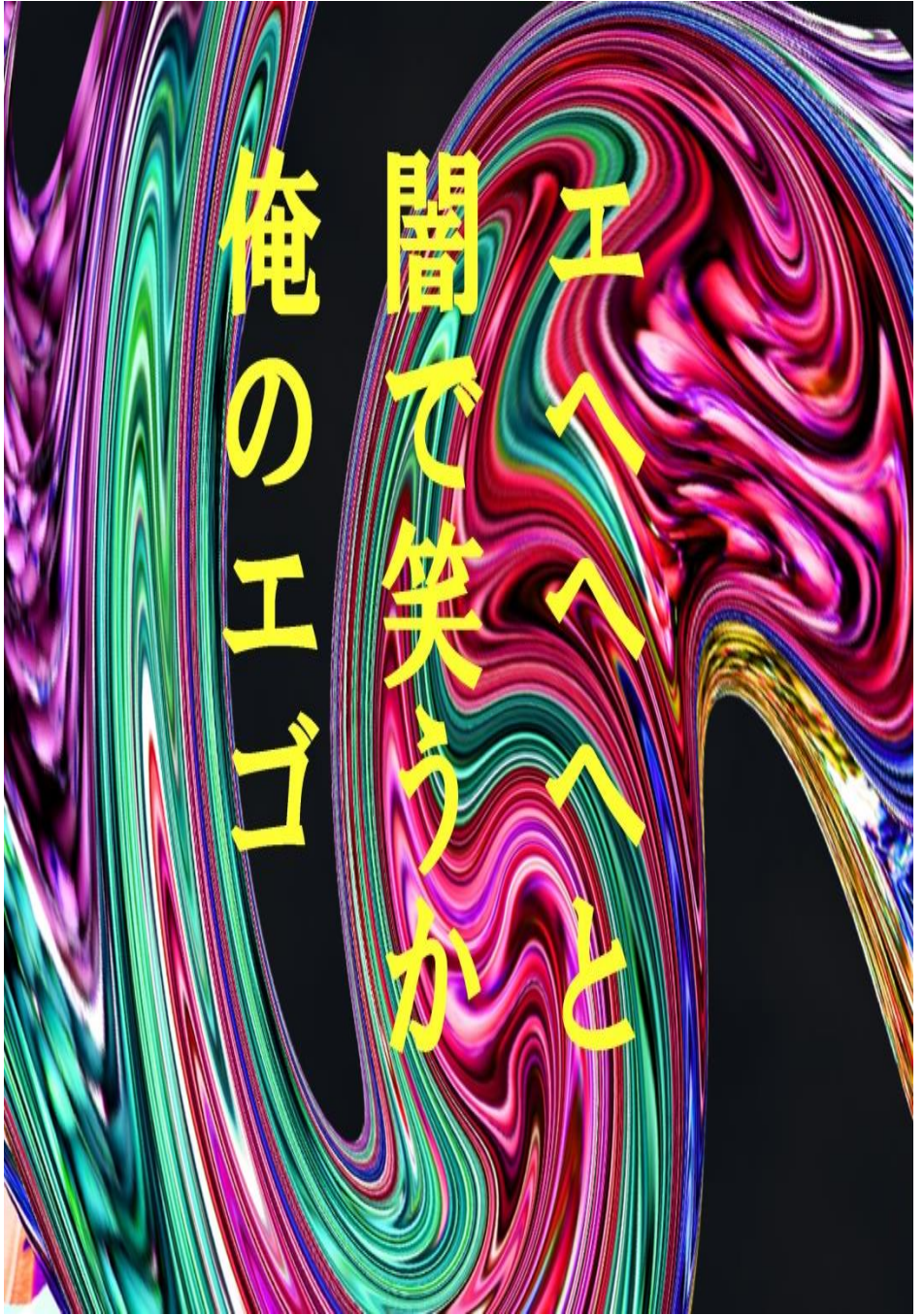
くそったれ
なにがなんでも
生きぬくぞ



遠くても
近くても
ああ
届かない



見上げれば
黙して照らす
夕けた月







いちにちが

まわるまわるよ

白昼夢

浮世かな

悩み泳いで

ゆらゆらと

A photograph of a lush green field of tall grass, possibly a meadow or a field of wildflowers. The grass is vibrant green and reaches up to the top of the frame. In the background, there are some trees and a clear sky. Overlaid on the grass is Japanese text in white characters.

草の下

死んで
畑は

じいさんが



ばあさんの

よろよろ直な

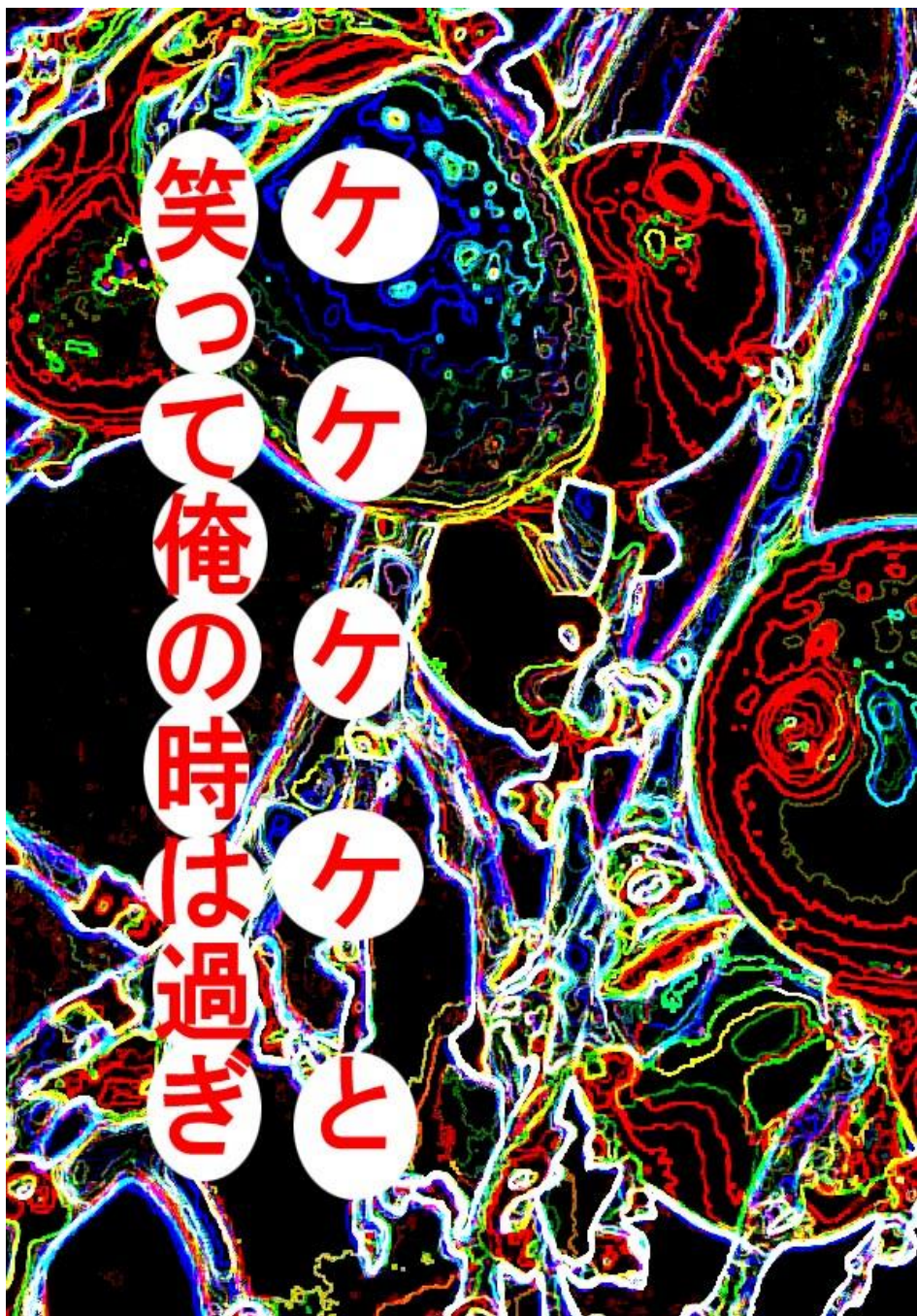
旅路かな



ウフフフフ

ユレテユラレテ

ネエアタ

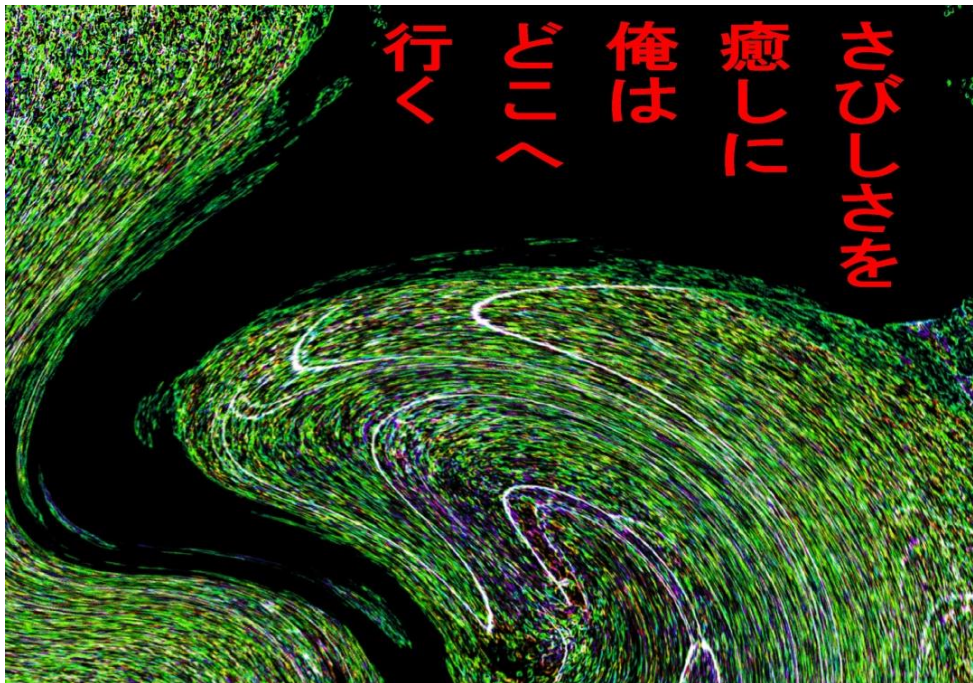


ケ
ケ
ケ
ケ
と

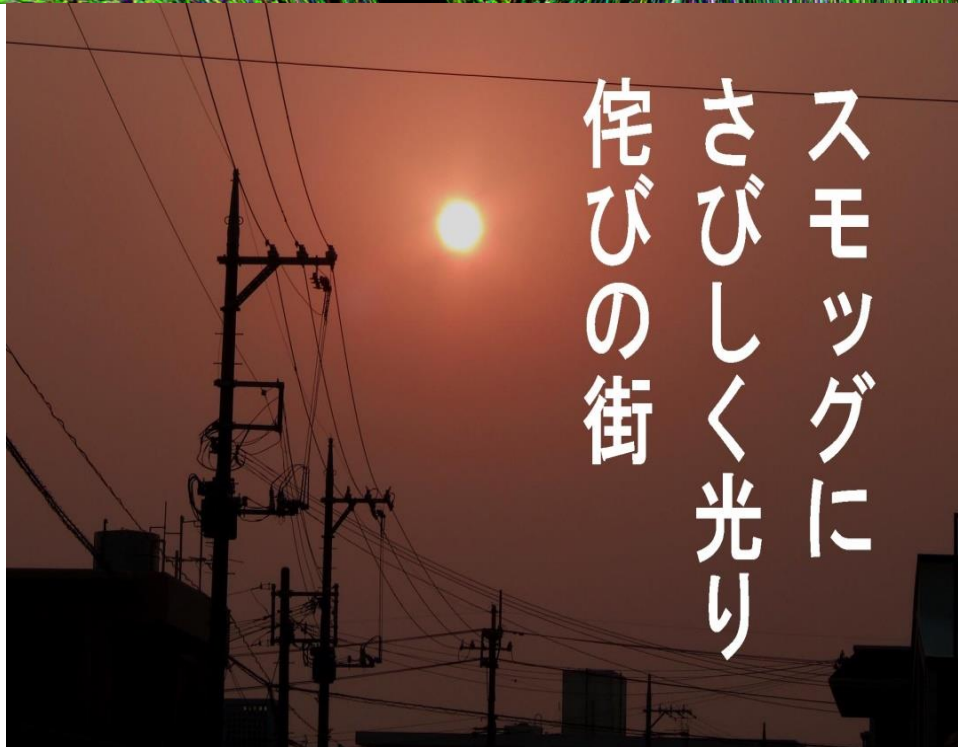
笑
つ
て
俺
の
時
は
過
ぎ



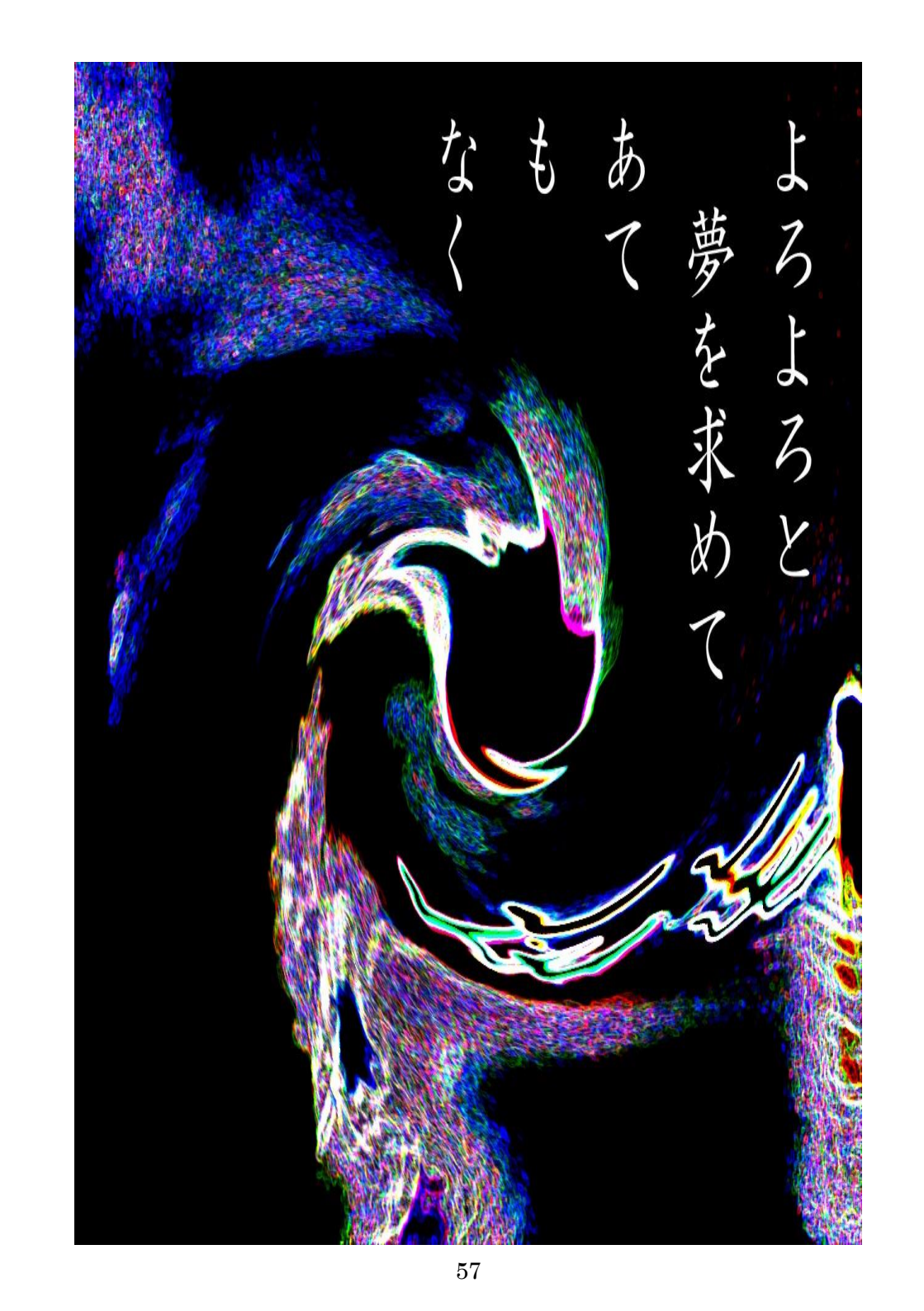
たくましく闇に輝く枯れ木かな



さびしさを
癒しに
俺は
どこへ
行く



スモッグに
さびしく光り
侘びの街



よろよろと
夢を求めて
あて
も
なく

幸せを

掴もうとあえぐ

枯れ枝や



とんでいく
なにかが
闇を
ひらり
ひら



酒を吐き

息詰まり

あなたに

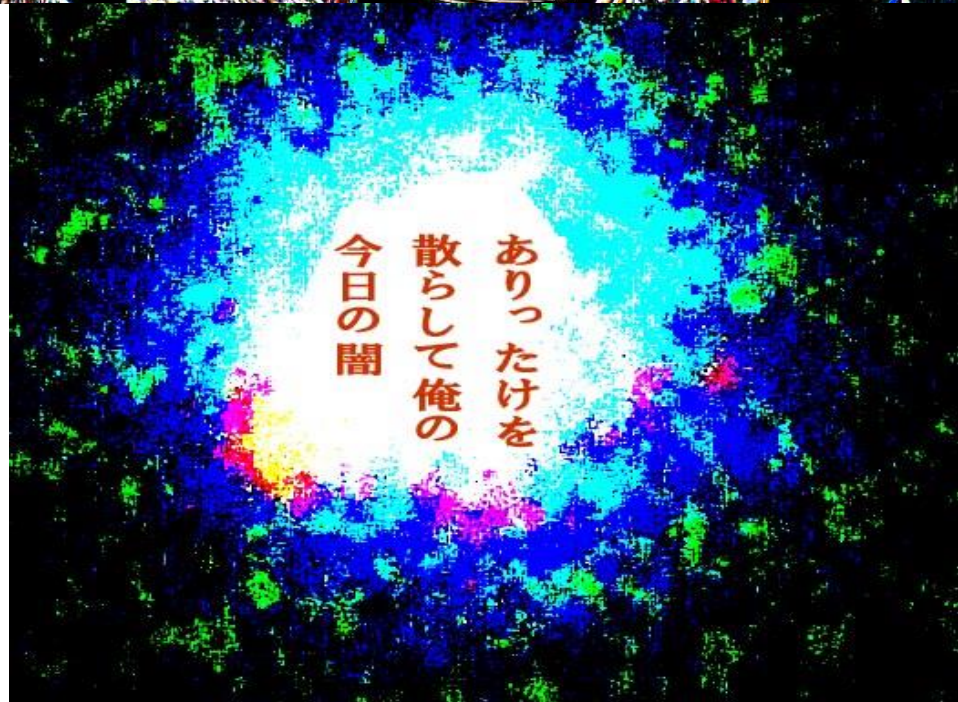
会いたい

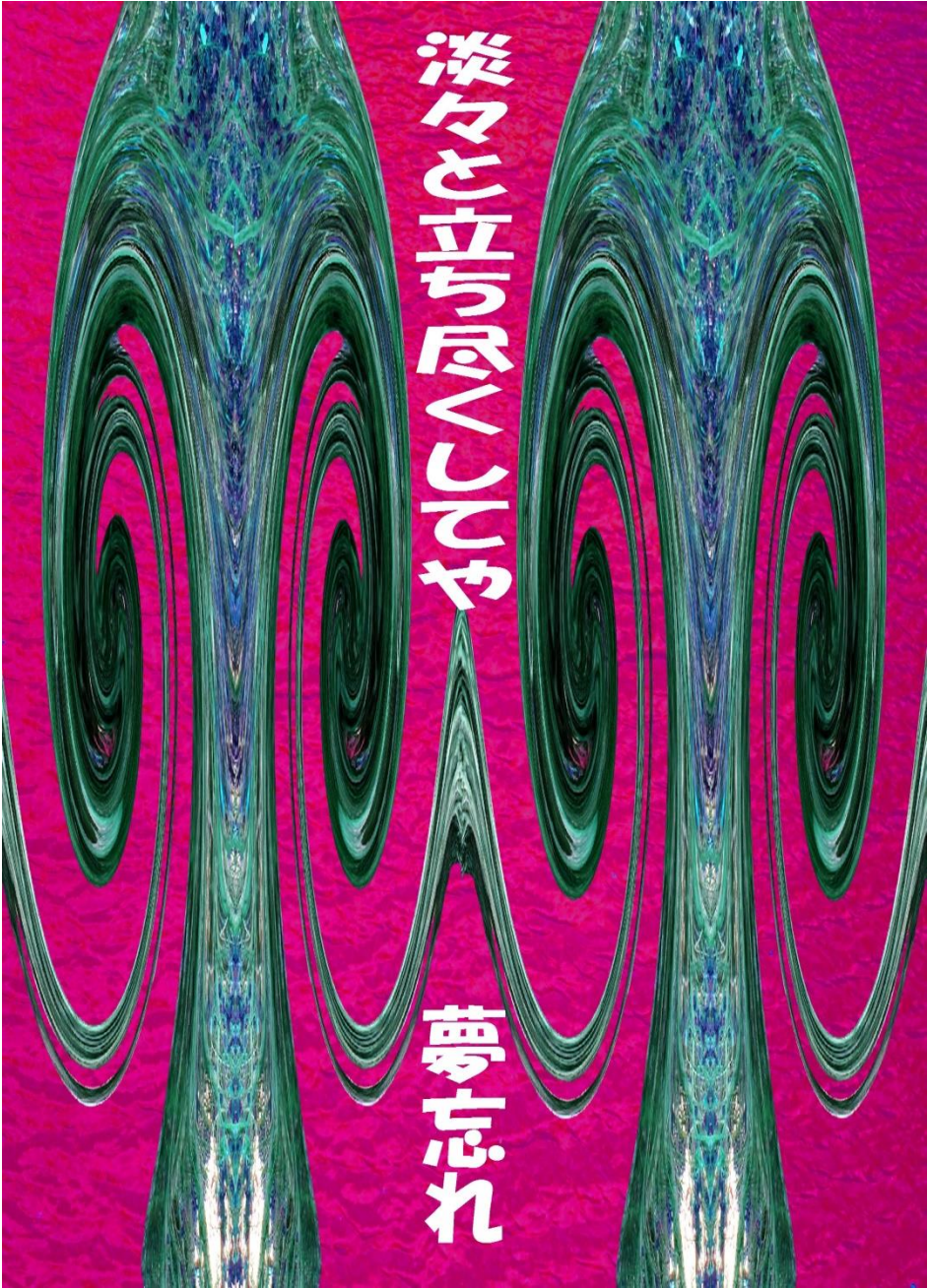


歪みゆく

俺のところに

茜色







風もなく
なにごともなく
春の刻



冬の陽にのんびり生きる

チンヌクよ



公園の

がじゅまるの髭

ぞろぞろと



おままごと

少女らの
春の陽の下



やわらかな
日差しを浴びて
春の昼



雨あがり

春

を

ま

ぶ

し

く

ゆうなかな

車か

橋の

上か

よた
よた

もどれよ

いう人なし

ふるさと

手にきり

微笑はむきみ

ああ夢

つかれて

生きる

生きる

いざしよ



具志川のキャンブコートニ
一前にあつた食堂跡の家。老
人夫婦がやっていた。食堂名が
「部隊前食堂」。食堂は20年
前に閉めた。



昔の味の沖縄カレーが好きで
毎日食べた。そして昼寝した。

ジジババよ
食いに来たぜよ
カレーライス

よたよたと
ほろよい愛の
部隊前食堂

アイヨット
カレーライス
部隊前食堂

やさしさが
舌に ジジババの
カレーだよ

やさしさが
ほんわかジジババ
カレー
ジジババよ
バイバイ 頬に
春の風

食後の眠り
のどかな
部隊前食堂
死もまた
幸 部隊前
食堂

部隊前食堂
今は
シャッター閉じ
錆びついた
シャッター
今日も素通り

ジジの死
途絶える俺の
カレーライス
ジジババの
錆びたシャッター
永遠に閉じ

さうりとぶ

夢の行き場が

十五のさよなら

墜ちてくる

純粹に 神

眼球射抜かれ

眼球・め

脳天から

尻へ突き抜ける

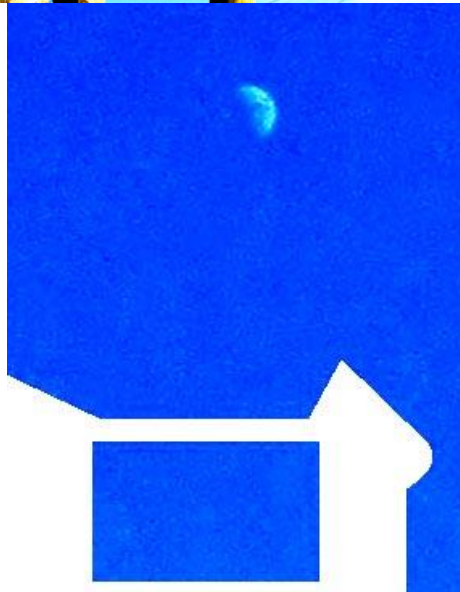
十五の死

生きるよと

遙か彼方の

月

は言ら





電柱の

彼方に

欠けた

月

独り



一カ月ぶり

三線教室

コロナめが

岩に立ち
おまえは今日も
ひとりかい





コロナ渦で
響き渡るよ
子らの声



さびしさよ
仲間激減
コロナめが





枝切られ
春陽の下で
死んでいく

パパイア



コンクリートのひび割れた箇所が生えているパパイアである。

築60年以上の外人住宅に住んでいる。あの頃の建築はずさんであり、裏庭は雑草が生えないようにコンクリートを敷いているが、コンクリートの質は悪く、厚さも薄いのであちらこちらがひび割れして

いる。ひび割れた箇所には雑草が生えている。定期的に除草剤を巻いて雑草を処理しているが、ひび割れが大きい箇所になると雑草に交じって5、6センチのパパイアの芽が出ていた。雑草を手でむしり取りパパイアを残した。

こんなひび割れにパパイアの芽が出るとは……。パパイアの種はどこからやってきたのだろう。パパイアは雑草のごとくあちらこちらの道路沿いや空き地に生えているが、まさかコンクリートのひび割れに生えてくるとは。不思議である。

せっかく生えているのでひび割れのパパイアがどのくらい成長していくか見ていくことにする。普通に大きくなるのか、それとも大きくなれないのか。もしかすると盆栽のように小さいままなのかも知れない。いや、私と同じ高さにはなるのかもしれない。分からない。

花は咲くだろうか。実はなるのだろうか。実はどのくらいの大きさになるのだろうか。小さいだろうか。パパイアの成長は早いので一年くらいでは結果は出る。水と肥料を上げながらパパイアの成長を見ていこう。まあ、普通の家ではこんなことは起きないだろうな。オンボロな外人住宅だからだな。



命拾いしたパイア^七

下水道工事をしなければならなくなった。60年前に建てた外人住宅は水洗便所であるが、庭の地下に汚水槽をつくり、汚水はお水槽に流した。汚水槽の汚水は地下に浸透させていた。^七

汚水槽は隣の家と共用である。ところが隣は新築することになった。汚水槽は埋めて村の下水道につながることにしたという。となると今の下水道は使用できなくなるので私も村の下水道につなげなければならなくなった。工事費用は37万円という。うわー高い。しかし、下水銅工事はやらなければならぬ。村から10万円の補助金が出るが、それでも27万円の出費だ。27万円はきつい。前の家主を恨む。^七

この家に移ったのは2年半前である。前任んでいた外人住宅は地主がアパートを建築するということが立ち退きになった。それで今の外人住宅に移った。前の家主が下水道工事をしなければ私が27万円も支払うことはなかったのだ。周囲の家のほとんどは下水道工事はやっている。この家と隣の家がやっていなかった。前の家主を恨む。しかし、恨んでみた^七

ない。仕方がない。業者に依頼した。^七



^七 工事が始まった。下水管はどこに通すかを聞くと、下水管を通す場所は決まっているという。村の下水道につながる設置場所すでに工事がされているのだ。

それはパパイアが生えている場所だった。もしかするとパパイアが生えている場所かも知れない。下水管を通す場所であるならパパイアは撤去しなければならぬ。パパイアはスラブが割れた穴から生えているから根の周囲はスラブであり移植するのは難しい。パパイアの命もこれで終わりか。と思ったが。幸いなことに下水管は写真のようにパパイアから少し離れた箇所であった。ほっとした。命拾いしたパパイアである。^七



小さかったパパイアはすくすくと育った。周囲は

スラブであるから水分はないと思うのだが、枯れることもなく緑の葉を広げて大きくなった。不思議である。^七

花が咲いた。パパイヤには雄と雌があり雄の花は実にならない。このパパイヤは雌だった。^七



さて、実は普通のパパイヤのような大きい実になるだろうか。これからの楽しみである。^七



予想しなかったことが起きた。パイアの葉がしなれて枯れてきた。大きくなると水分が不足するだろうから、スラブに穴を開けた。そして、散水容器を設置して、水分補給を徹底した。水分不足で葉が枯れることはないはずである。

原因は強い寒風だった。ここは坂の途中にある場所である。北東の風をまともに受ける。寒風が吹く日が続いたために葉がしなれて枯れていった。春になれば持ち直すと思っていたが葉は全部枯れた。何十年もパイアを育ててきたが初めての体験である。



葉は枯れてすべて落ちたのに、実はまだ落ちない。

七

実は重いから落ちるはずなのに落ちない。落ちないで色が緑からだいだい色に変わり熟してきた。完全に熟すまで落ちないのだろうか。



七

と置いていたら、パイアの木はまだ枯れていなかった。実の間から小さな葉が出ていた。上のほうは枯れて茶色になっているが実の上から根ま



七



七

小さな茎からいくつもの葉が出てきて大きくなった。この枝の上の茎は枯れた。枝の下は生きている。死にそうなパパイヤに元気な葉を広げるようになったのである。植物の生命力の強さを見た。でも、このパパイヤが育っていくかどうかは未知数である。この枝なら暴風に簡単にへし折られるだろう。八重山地方に台風が接近している。もし、ここにやってきたら簡単に枝はへし折られる。パパイヤの命は台風がやってくるかこないかで決まる。台風がやって来ないとしても冬になれば北風が吹く。北風に葉が枯れるかもしれない。まあ、どうなることやら。



七

今年、台風は来なかった。台風が来ていたら枝は折れていただろう。枯れるかそれとも別の場所から新しい芽が出ていたか。台風が来なかったので新しい枝は成長していった。夏の太陽の下で大きくなっていった。根も太くなっていった。スラブの穴のほとんどは根になった。水分は補給できるのか。普通に成長することはないだろう。どのくらい大きくなるのだろうか。



小さな枝はゆっくり大きくなった。葉っぱもかなりおおきくなった。それから花が咲いた。花は次々と咲いた。花は小さな実になった。実はゆっくりと大きくなっていく。夏から秋になり。秋が過ぎて冬になった。冬になったがそれほど寒くない日が続いた。^七

写真のように実は大きくなってきた。大きいといっても普通のパイアの木より木小さいので実も小さい。普通の大きさになるかどうかは分からない。大きくなるかもしれないし小さいままかも知れない。^七

これから厳しい冬の北風が吹く季節になる。去年のような北風が吹き続けたら葉は枯れてしまうかもしれない。枝が折れてしまうかもしれない。どうなるだろうか。12月は厳しい北風は吹かなかった。しかし、1月は厳しい北風が吹くだろうな。^七

長年パイアを育てているがパイアが北風によって枯れてしまうのは去年初めて経験した。だから、今年は大丈夫だろうと思う。が去年起こったことは今年も起こる可能性がある。折れて枯れるか、折れないで生き延びるか。2月になれば結果が出る。^七

生き延びろよ、パイア。^七

南島の

冬を安穩

花すすき



「船頭小唄」はとても好きな歌で少年の頃はよく歌っていた。利根川で貧しい船頭の夫婦が小さな船を漕いでいる姿をイメージして歌っていた。だがイメージできないのがあった。詞に「俺とお前は利根川の花の咲かない枯れすすき」とあるが、枯れすすきをイメージできなかつた。沖繩のすすきは年中青々と茂っていて枯れることはない。枯れすすきは見たことがなかつた。

有名な俳句で「幽霊の正体見たり 枯尾花」がある。尾花とはスキである。沖繩のすすきは枯れないから幽霊にはなれない。

沖繩のすすきは秋に咲き、冬の間ずっと写真のように咲き続けている。のんびりと楽しく冬を過ごしているように見える。

ばあさん
今日も来たぞ

食わせろ



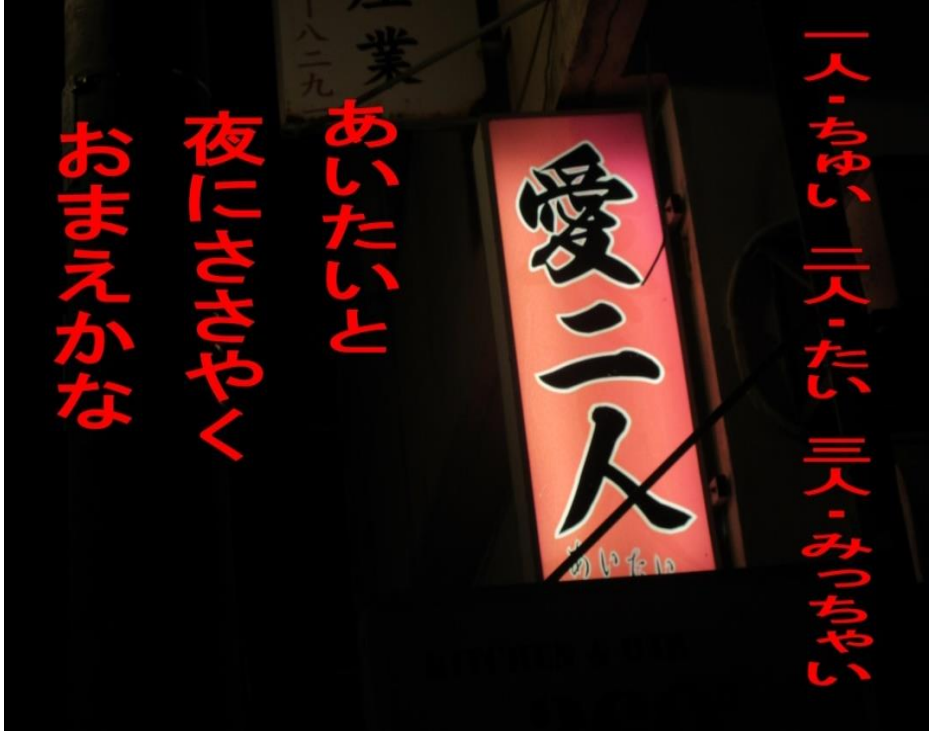
一人・ちゅい 二人・たい 三人・みっちやい

愛二人

あいたいと

夜にささやく

おまえかな



夜更けて

今日も来た

風酔



酔いどれ

愛もとめ

ZUKAZUKA





子を産み ここに生きる アリラン

韓国の釜山で生まれ育った。

成人になり大阪で就職した。

恋をした。

男は沖縄の人間。

結婚して沖縄に住んだ。

子供が生まれた。

幸せになるはずが男は離れていった。

我が子を愛する女は

自分の故郷釜山で生きるよりも

我が子の故郷この地で生きる決心をした。

降る雨を

神経が

なにもかも

突き立てて

口で含んで

溶けてゆらりの

埋めてまどろむ

うしろを向いて

叫ぶ夜

酒の夜

酒の夜

きょうの春

胸を刺し

脳が鉛になり

抱きたい

神経が

裏返し

口を塞ぎ

胸には

この世を捨てた

疲れ果てて

五回のベランダ

涙流れ

穴があき

女の胸

ひるヒル昼

赤い靴

踊ろう

あなたをい

街の灯を

俺は

チークを踊ろう

だく夜 死ねな

こぶしで潰す

何を

胸と胸

い日々 俺

酒の日々

求めて

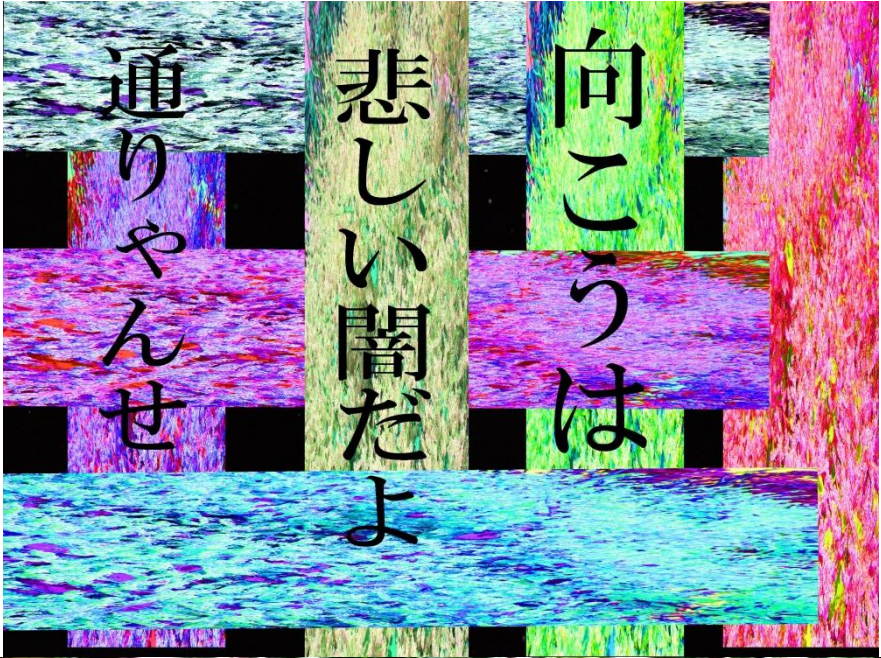
おとこおんな

知らぬ知らぬの

浮世かな

生きて

いるのか



這い上がれ
這い上がれ
這い上がれ

夢

金毒に
知らず知らずに
胸腐れ

胸に爪
をたて じんわり
酒の夜

寂しいよ

寂しいよ

寂しいよ

心

株を買い

株を売り

愛に麻痺

夜

街の死ねぬ

おんな おとこ

酒の日々

胸を刺し
口を塞ぎ
涙流れ

キリリキリ
深夜の脳が
狂う狂う

しあわせを

金でくるんで

グーチョキパー

子を愛し
子を育て
老いて
死ぬだけ

カラカラ
夢がカラカラ
街だカラ

脳が 鉛になり

胸には穴があき

岩

永遠に

横たわり

無に

横たわり

噴火噴火噴火噴火
噴火噴火噴火噴火

狂い咲く

夏のガープの

闇の死児

昼と夜

つなぐ神経

ブーダスタ

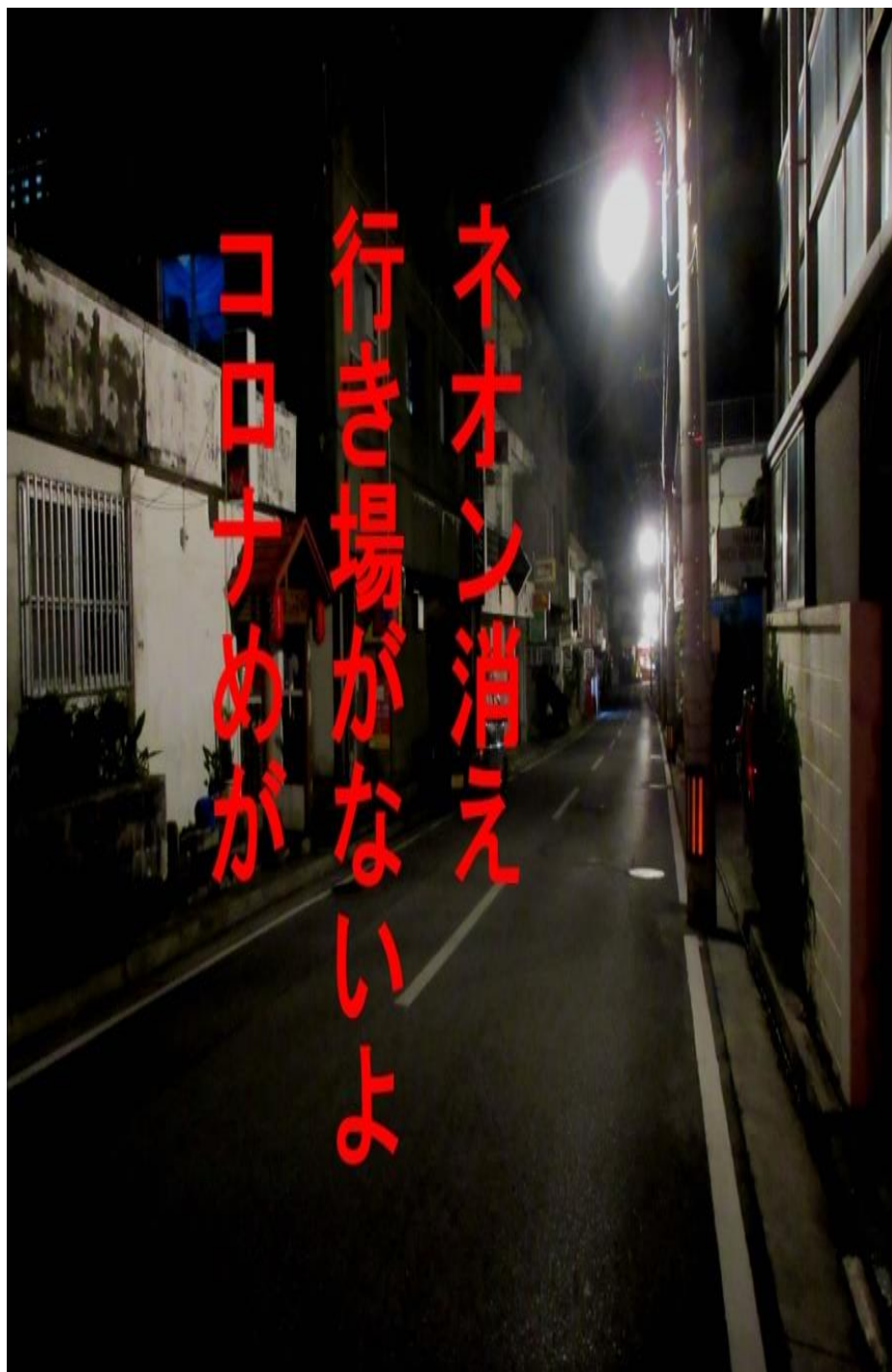
虹の橋
虹の橋



この道路を港町通りという。でもここが港町というには？である。港はかなり離れた所にあるからだ。港は比謝川河口にあり崖に囲まれていて周囲には店も住居もない。港だけがある。港からかなり離れているがここが一番近い住宅街で道路が港に通じているから港町通りと呼んだのだろうか。

子供の頃は野原でありすきやがじゅまるが生えていた。家は一軒もなかった。嘉手納町にはアメリカ兵相手のバー街があったが町民相手のバー街はなかった。1960年代には嘉手納町の人口は増え、経済も発展していった。そんな時に登場したのが港町通りに町民相手のスナック街である。最初からスナックなどの飲食街にする目的でテナントビルはつくられ、二階にもスナックがあった。あの頃のスナックはほとんどが一階にあった。とても華やかなスナック街になった。

同期生の女性がスナックをやっているというので友人連れてこられた。1970年の頃だった。栄えていた港町であるが今はスナックは半減した。廃れているスナック街である。これがスナック街の歴史的な運命なのだろう。スナックは私たちが若い頃は若者たちの通う飲み屋として登場し、中年になる。中年の心の安らぐ飲み屋になり、高齢になると高齢者でも楽しめる飲み屋になった。戦後間もない頃に生まれた私たちの人生と歩んできたのがスナックである。



無言のまま

コロナ

に錆びて

日々は過ぎて





寂れていくスナック街。高齢者が経営するスナック。コロナで長い長い閉店が続いている。店が開けるようになってからもこのまま閉まった店もあるだろう。

再びシャッターが開くスナックは何件だろうか。



錆びて無言

開かず

シダシダシダ







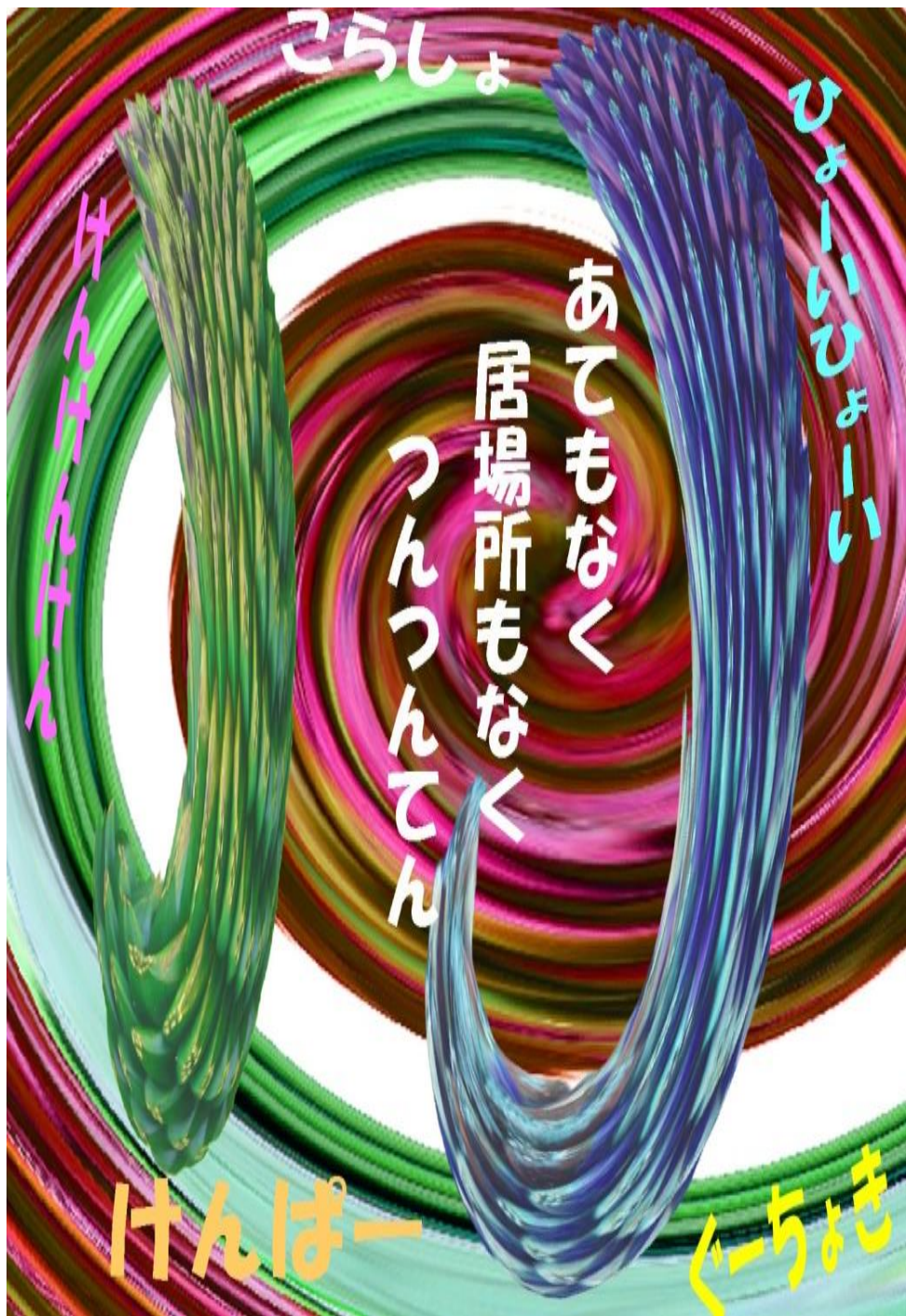


狭
心
症

よ
ろ
ろ
よ
た
よ
た

ま
ぶ
し
さ
に





こらしょ

ひょーいひょーい

あてもなく

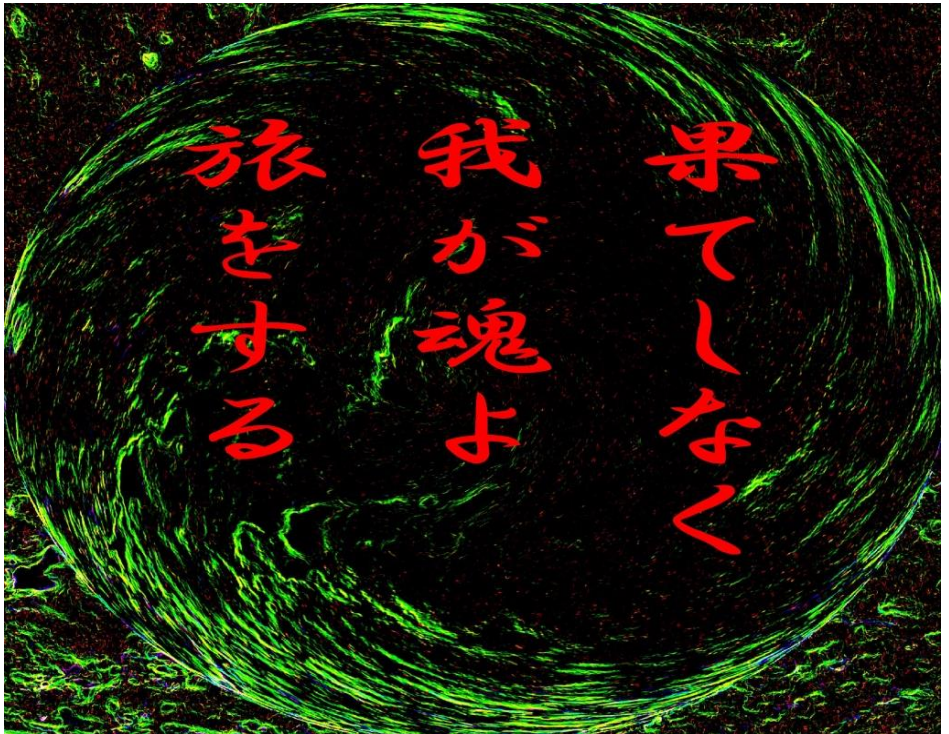
居場所もなく

つんつんてん

けんけんけん

けんぱー

ぐーちよき



果てしなく
我が魂よ
旅をする



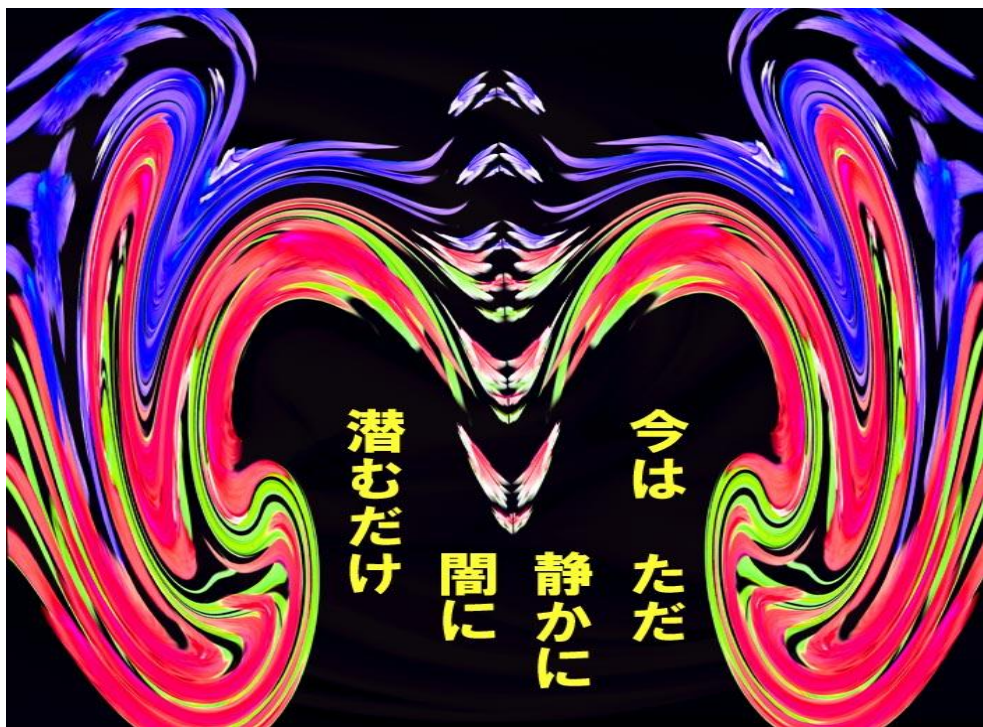
なにくそと
生きる命の
たくましさ



あなたをい

だく 夏 死ぬな

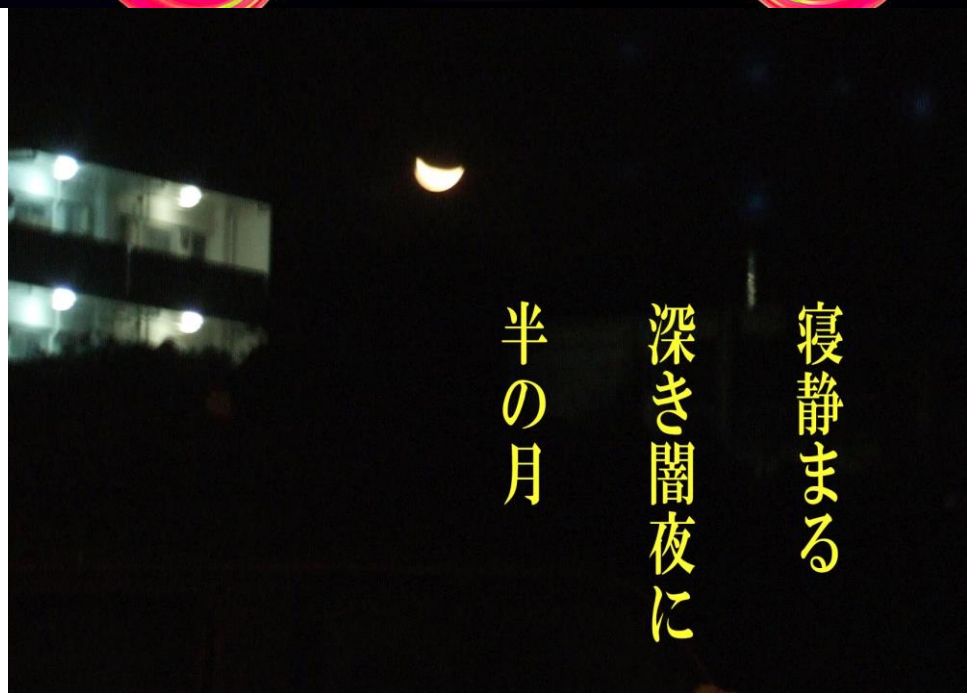
い 街 俺



潜むだけ

闇に
静かに

今は
ただ



寝静まる

深き闇夜に

半の月



農民の血を凍らせる細ききび



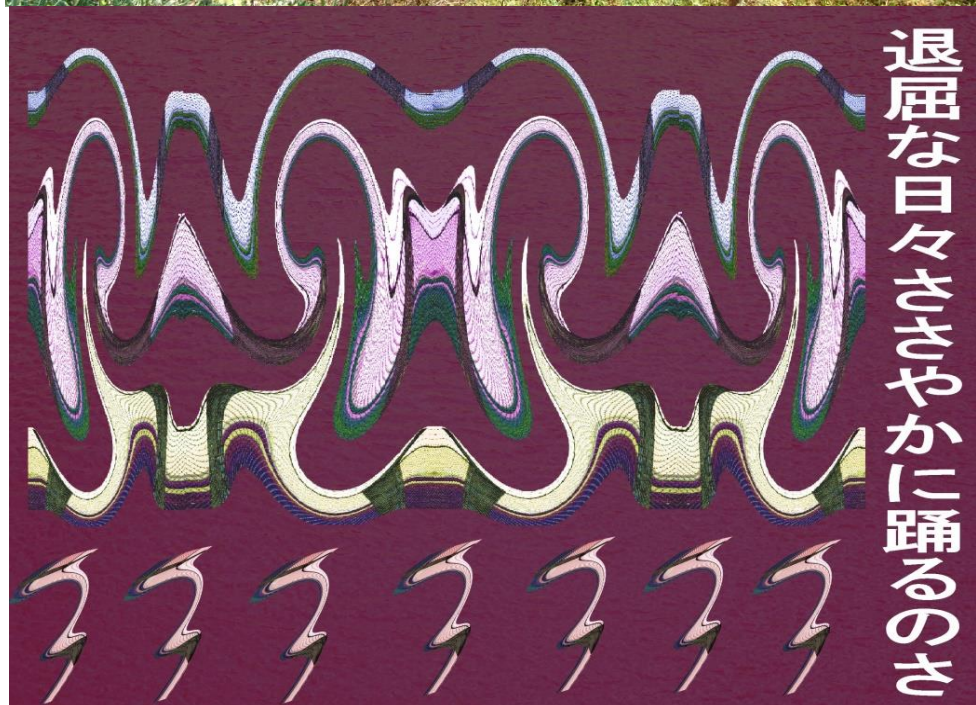
枯れ枝の
遥か彼方の
青い空



大根よ

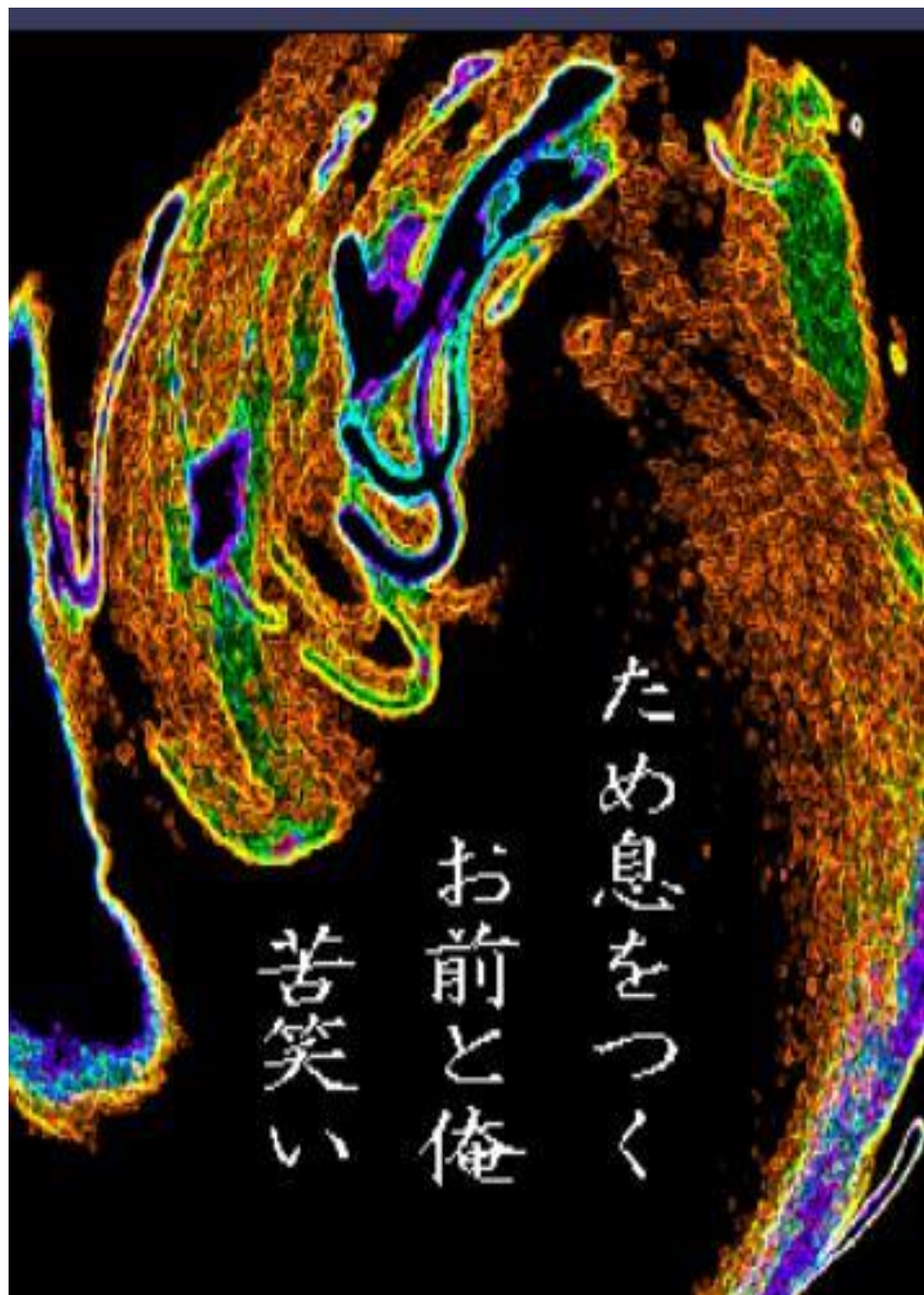
途惑い咲くや

残されて



退屈な日々ささやかに踊るのさ

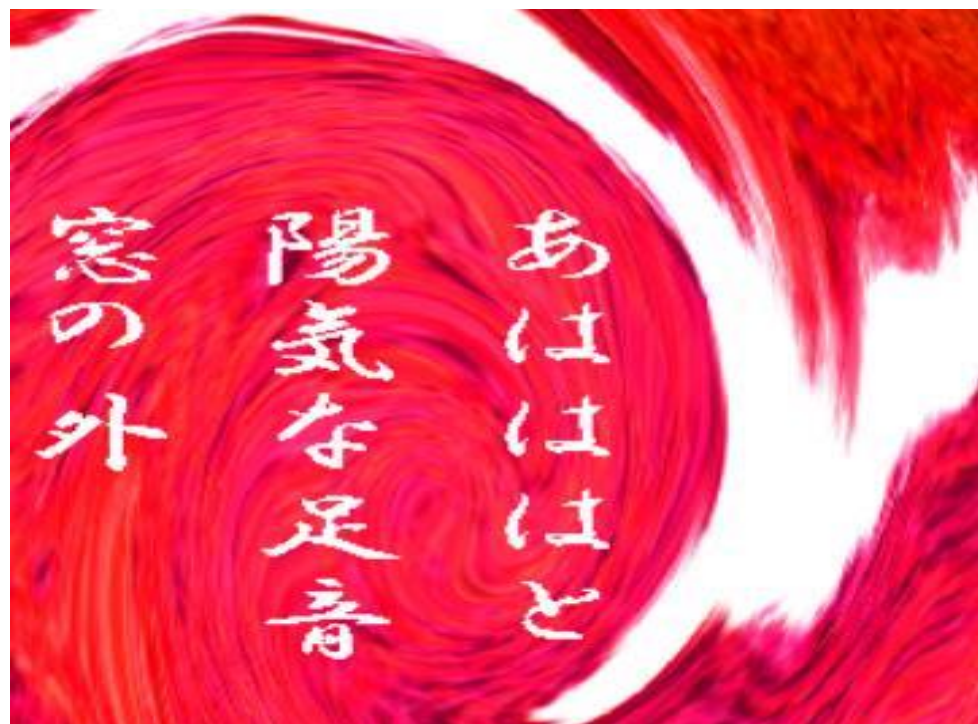




ため息をつく

お前と俺

苦笑い



あはははど

陽気な足音

窓の外



やさしさが

枯れてネオンがゆるら



「新コロナ」のアウトハイクに用いたグラジオオラスは通り道に咲いていた。花園に咲いていたのではない。グラジオオラスの輝く赤の花は新型コロナへの不安を吹き飛ばす。そんな気持ちハイクにした。



グラジオオラスは春に咲く雑草であるが赤い花が鮮やかに咲く。しかし、夏になると花は枯れていく。周囲の雑草はますます活気になっていくのにグラジオオラスだけは枯れて命を終えていく。



ここは畑である。畑といっても周囲は住宅が立ち並ぶ道沿いの小さな畑である。家からイオンに歩いて行くときの途中にある畑である。去年はなすびやピーマン、ゴーヤーなどを育てていた。しかし、去年の秋ごろから野菜の栽培をしなくなり、放置した。放置すると次第に雑草が広がっていく。

グラジオラスは雑草である。戦後に沖繩に入ってきたらしい。グラジオラスは畑の周囲や野原に植わっている。花から甘い蜜が吸えたので、子供の頃はグラジオラスの蜜を味わった。

グラジオラスの花は鮮やかな赤である。雑草とは思えない。少女たちは普通は行かない野原に行ってグラジオラスの花を集めて家で飾った。少女は美しい花を楽しみ、少年は花の蜜を吸って楽しんだ。

グラジオラスは今でも畑の周囲や道路の側に植わっている。グラジオラスの赤がとても好きである。花園のグラジオラスには白や桃色など色々な花があるが好きではない。花園のグラジオラスには興味がない。野原に植わっているグラジオリ

ラスの赤い花が一番好きである。

グラジオラスで考えさせられたことがある。それは自然の「美」についてである。「美」は普遍性ではなくそれぞれの人間の世界で感じるものであるということ少年の時に知った。

グラジオラスは野の花であり子供にとって雑草には見えない。しかし、農民にとっては畑を汚す雑草であった。グラジオラスが畑に植わっていると農父は根からとって捨てた。しかし、全てを排除したはずなのに翌年には何本かのグラジオラスが植わっていた。グラジオラスは繁殖力が強く、排除しても排除しても畑に植わった。農父は憎々しげに畑のグラジオラスを採って捨てた。

中学生の時に、花が咲いて枯れてから捨ててもいいじゃないかと農父に言った。花がきれいであるし、2、3本ならさつまいもの害にはならないから取らないようにと農父に言うのと、農父は私の言うことが全然理解できないという顔をした。私は農父を説得したが子供の訳の分からない戯言にしか感じなかったようだ。私は初めて農父がグラジオラスの花になにも感じていないことを知った。

私たちは学校で和歌を通じて日本の自然の美について習う。人間は誰でも自然に美を感じているものだと思っていた。しかし、農父のグラジオラスに「美」を全然感じていないことを知った。農父だけでなく美しい自然に囲まれて生きている農民は自然の「美」を感じていないのではないかという疑問が生まれた。

自然「美」は農民ではなく貴族が感じたものであると考えるようになった。源氏物語の小説、枕草子の随筆は貴族の世界に生きている人間が感じたものである。封建社会の支配者階級がつくり出したものであると考えるようになった。貴族作品に興味を持つことができなくなっていくた。

グラジオラスは畑や野原に生息しているが他の雑草に比べると繁殖力は弱い。「春に咲き疲れて夏に枯れていく」の写真撮った畑の側を久しぶりに通って驚いた。畑は放置されたままで雑草が広がっていた。畑主は高齢者であった。もしかすると畑仕事ができなくなったのだろうか。もし、病気なら、病気が快復してから復帰するだろう。しかし、高齢になり畑仕事ができなくなり止めたのなら、畑はこのまま雑草が繁茂していくだろう。

グラジオオラスは植わってはいるが他の雑草の勢いに負けて目立たなくなっている。繁殖力では他の雑草に負けている。グラジオオラスは一年草である。畑が放置されたままであると来年には周囲の雑草がグラジオオラスより高くなり、陽のあたらないグラジオオラスの新芽は育たず消滅するかもしれない。

放置され

雑草木群れる

畑よ



雑草の中で好きな草も植わっていた。

花は白くて綿のようである。花にふうつと生きを吹きかけると飛んでいく。おもちゃが全然ない時代の子供にはこの花も一種のおもちやだった。



この草も沖縄の至る所に植わっている。親しんだ草であるが名前を知らない。ネットのgoogleで調べた。この花に似た植物があり名前はチガヤといい、沖縄にも植わっていると紹介していた。チガヤを沖縄名カヤ、ガヤ、マカヤと呼んでいると書いてあった。ううん。とするとこの草はチガヤではないと思う。沖縄名の三つは何度も聞いたから知っている。確かに三つとも一つの雑草の名前である。しかし、写真の草とは違う。

茅葺き屋根の材料として重宝されたため、沖縄では「真の茅」という意味で「マカヤ」と呼ばれたと説明している。マカヤは知っている。マカヤは屋根の材量、豚小屋の敷き草に使用していた。豚を飼っていたのでマカヤを豚小屋に敷くのを手伝ったことが何度もあった。マカヤは1、5メートルくらいまで成長する。しかし、写真の草は30センチくらいで

あり屋根の材料にするには短い。それにマカヤはスキくらいに繁茂する。写真の草はマカヤなどが繁茂していくと駆逐される。



放置された畑では雑草の縄張り争いが起こる。マカヤとススキが拡大していく。グラジオラスは次第に駆逐されて減っていく。写真の雑草は端っこで生き延びる。マカヤとススキではススキが強いので次第にススキが広がっていく。ススキが勢力拡大している間にゆっくりと広がるのが雑木のギンネムである。畑には三本のギンネムが植わっている。木はゆっくり成長していく。ギンネムは種ではなく根から広がっていく。木とススキの縄張り争いは何年も続く。遠くに見える木がギンネムである。あのように高くなり密集するのでススキが生えることはできない。畑がずっと放置されると10年後にはギンネムだけの畑になるだろう。

これから繰り広げられる雑草雑木の勢力争いを写真に撮って掲載していこうと考えて楽しんでいた。ところが二週間後にその畑に行くと雑草は全て刈り取られていた。

なぜ、雑草を刈り取ったのか。再び畑をするのか。いや、畑にするのならこのような刈り取りはしない。畑を再開するには雑草刈りである。見た瞬間に畑を放置した理由を知った。この土地に家を建てるのだ。家を建てるために畑を放置したのだ。多分畑主がこの土地を売ったのだだろう。で、家を建てるために畑は放置されたのである。

周囲は新築の住宅やアパートが多い。所々に畑がある。畑地域に次第に住宅が増えていつている状態である。この畑の右側は新築の住宅である。左側は空き地であり、資材置き場を利用している。この畑に住宅が建つのは当然の流れである。偶然、「春にさき・・」の写真を撮ったのがこの畑であった。グラジオラスが群生している場所はほとんどない。この畑だけは群生していてグラジオラスの花が群れで枯れていたから「春に咲き・・」のオートハイクが浮かんた。それから数週間後には雑草が一斉に刈り取られたのである。

自然
かつさら
我が物顔の
ウンボー



一週間後の写真である。ウンボーで土は削り取って整地してある。一瞬にして畑が消えたという思いである。ささやかな楽しみが一気に吹き飛ばされた。複雑な自然の営みを一気に消してしまうのが人間である。人間が一番残であるなあと思ってしまう。



私は野菜や石鹼などの日用品の買い物には家から1kmほど離れたマックスバリュウに歩いていく。近くの個人商店は全てなくなり、マックスバリュウだけがある。マックスバリュウが個人商店を閉店させたのである。

マックスバリュウに行く途中に小さな畑があり、老人が野菜作りをしていた。しかし、老人の姿は見なくなり、畑は次第に雑草の畑になっていった。春になってグラジオラスが咲いた。夏になるとグラジオラスは枯れていき、ギンネムや雑草が畑に広がった。しかし、畑にユンボーが入り一日で雑草は取り払われ赤土の畑になった。ユンボーが入るとことは畑を整地して、住宅を建設するということだ。写真を撮り、アトハイクをつくった。

予想通り二階建ての住宅が建設された。建設された住宅を写真に撮った。しかし、アトハイクは浮かんてこなかった。つくろうと思えばつくれたが、無理してつくる気にはならなかった。だから写真だけにした。

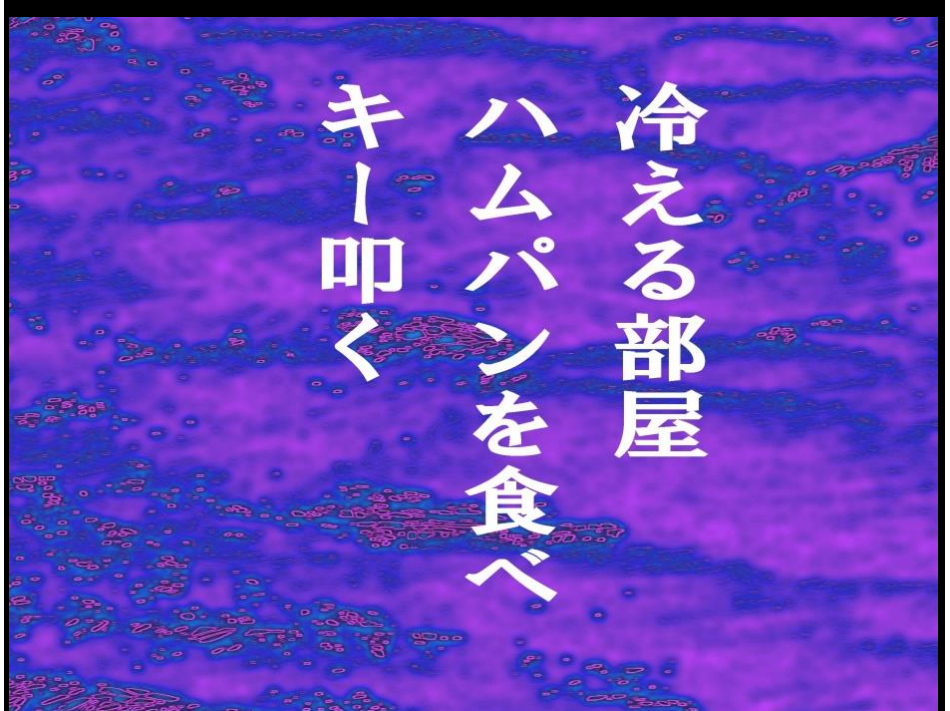




秋日和
ひっそり町の
裏通り



うふふ
踊る遊ぼ
か
さあ
ぜに舞おう





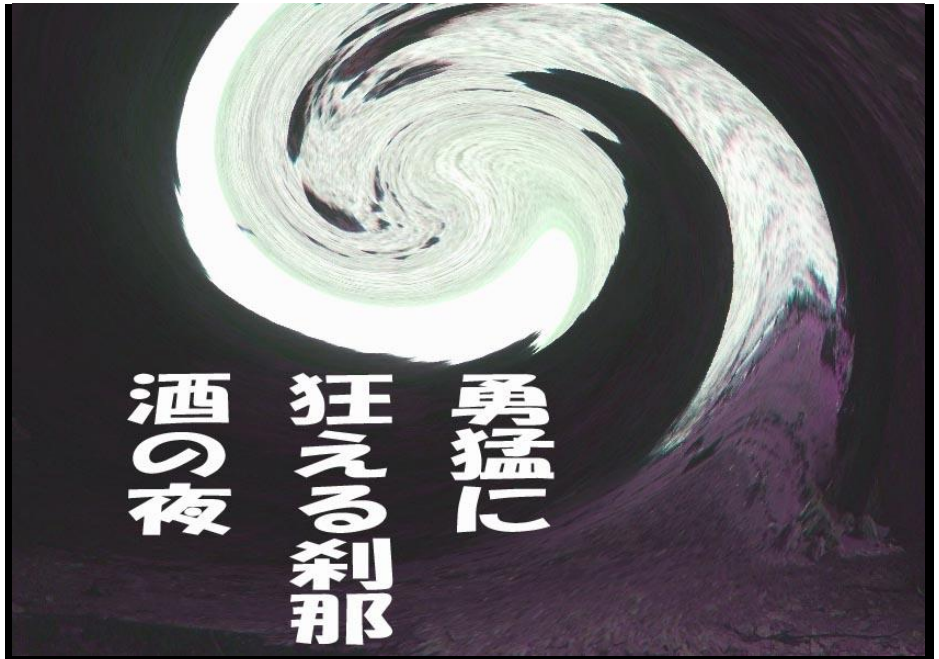
立つんだー

ダイコン
ジョー

立ち上がり



葉を広げ胸張り生きる磯あざみ



酒の夜

狂える刹那

勇猛に



昼下がり

サッカーボール

根に独り



公園の
椅子が退屈
昼下がり




虚しさも
なには
ともあれ
夜が来る

なごみもあれが...
ふふ

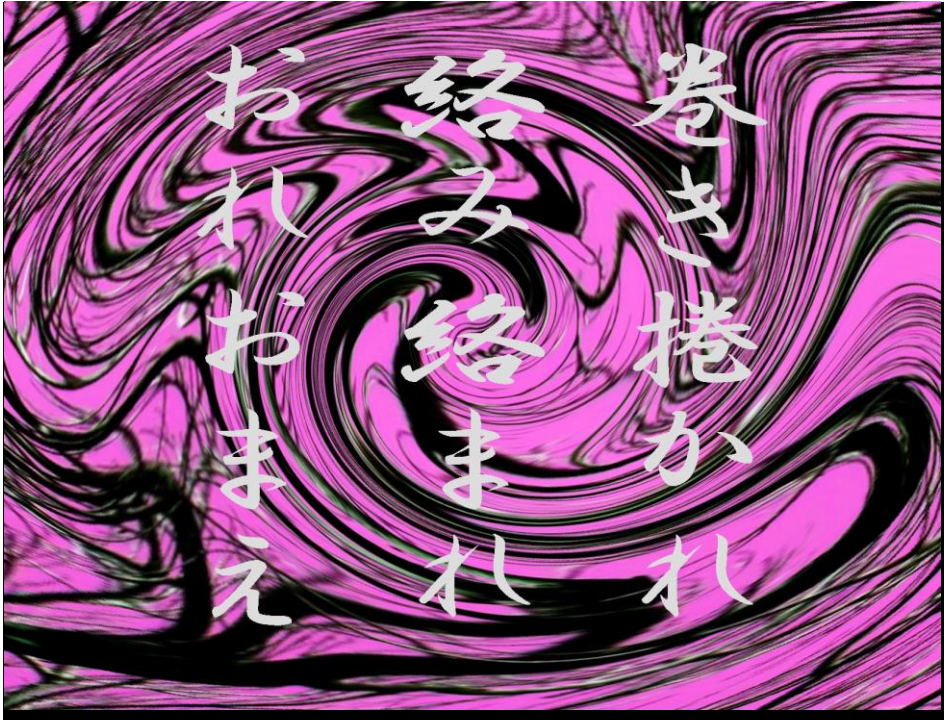
空しさか...
ふふ



戯れる
無邪気な黒と
悩む赤



潮風を
しのいで生きる
岩が菜



巻き捲かれ
絡み絡まれ
おれおまえ



街霞む
のどかな浜の昼下がりに

崖の松
凛々しく暮れの
威風かな







温もりを
求め彷徨う
酔いどれめ



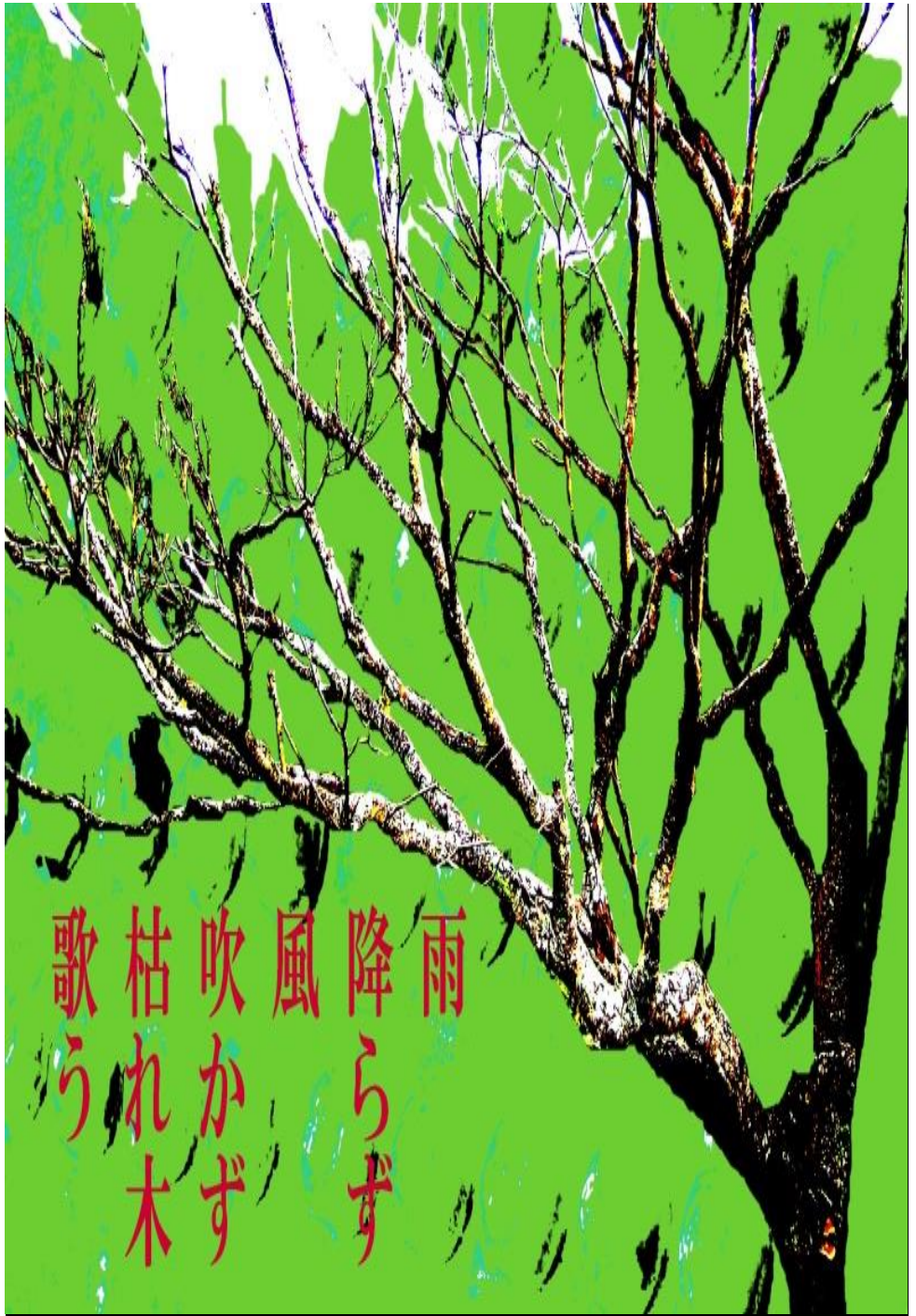
憶い出を
阻み雑草生い茂り



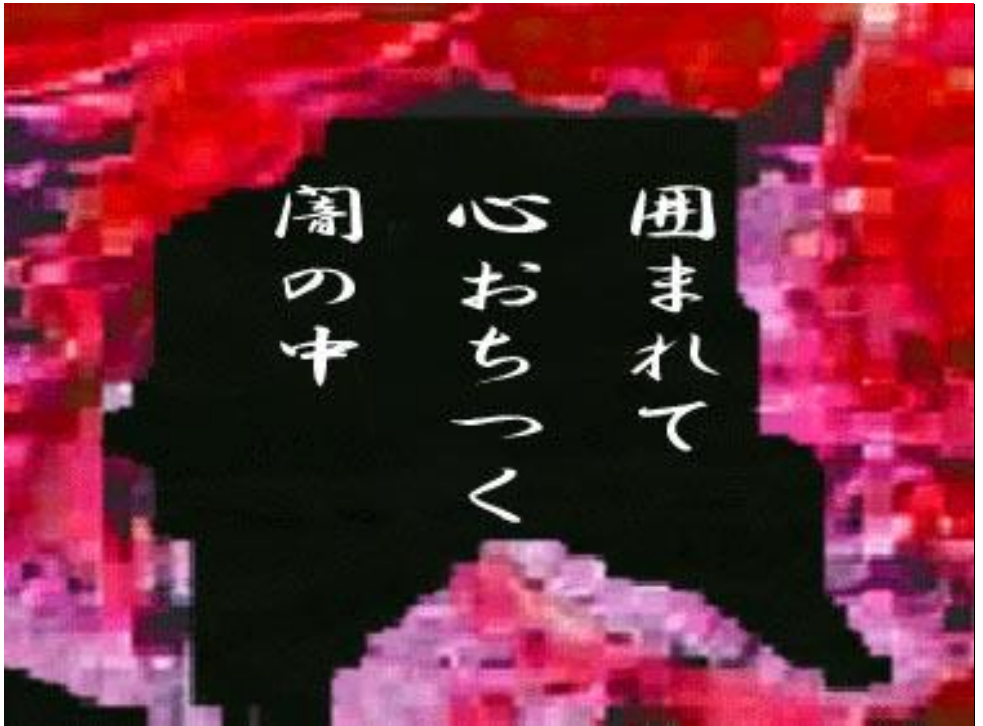
縁側に
すずめ二羽
きみ
想う日々

雨水が
造りし岩間の細き道

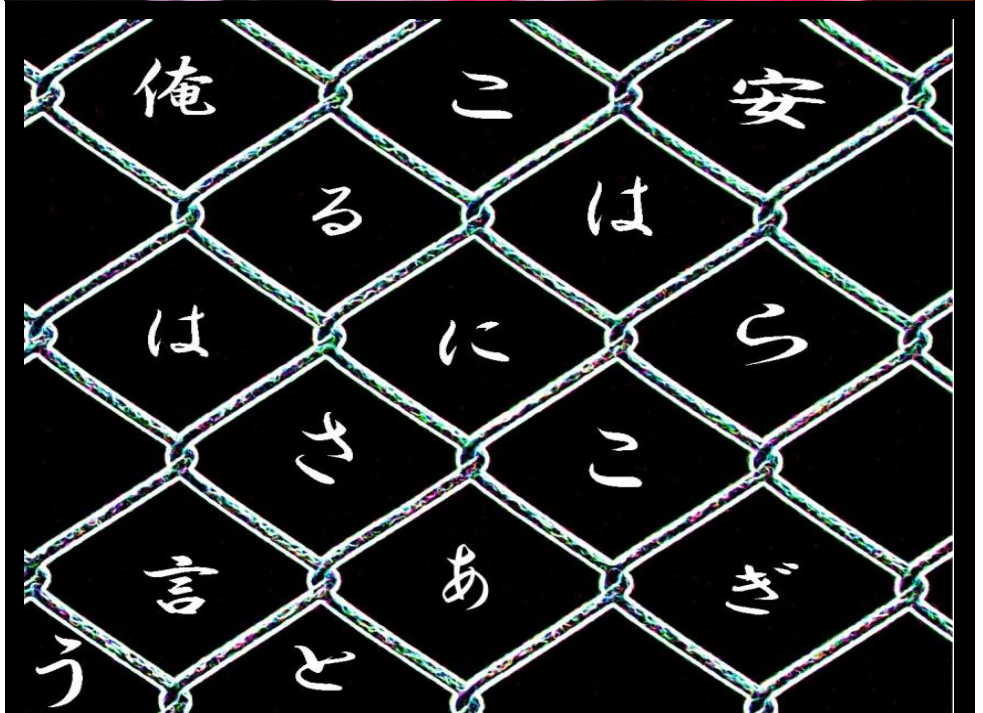




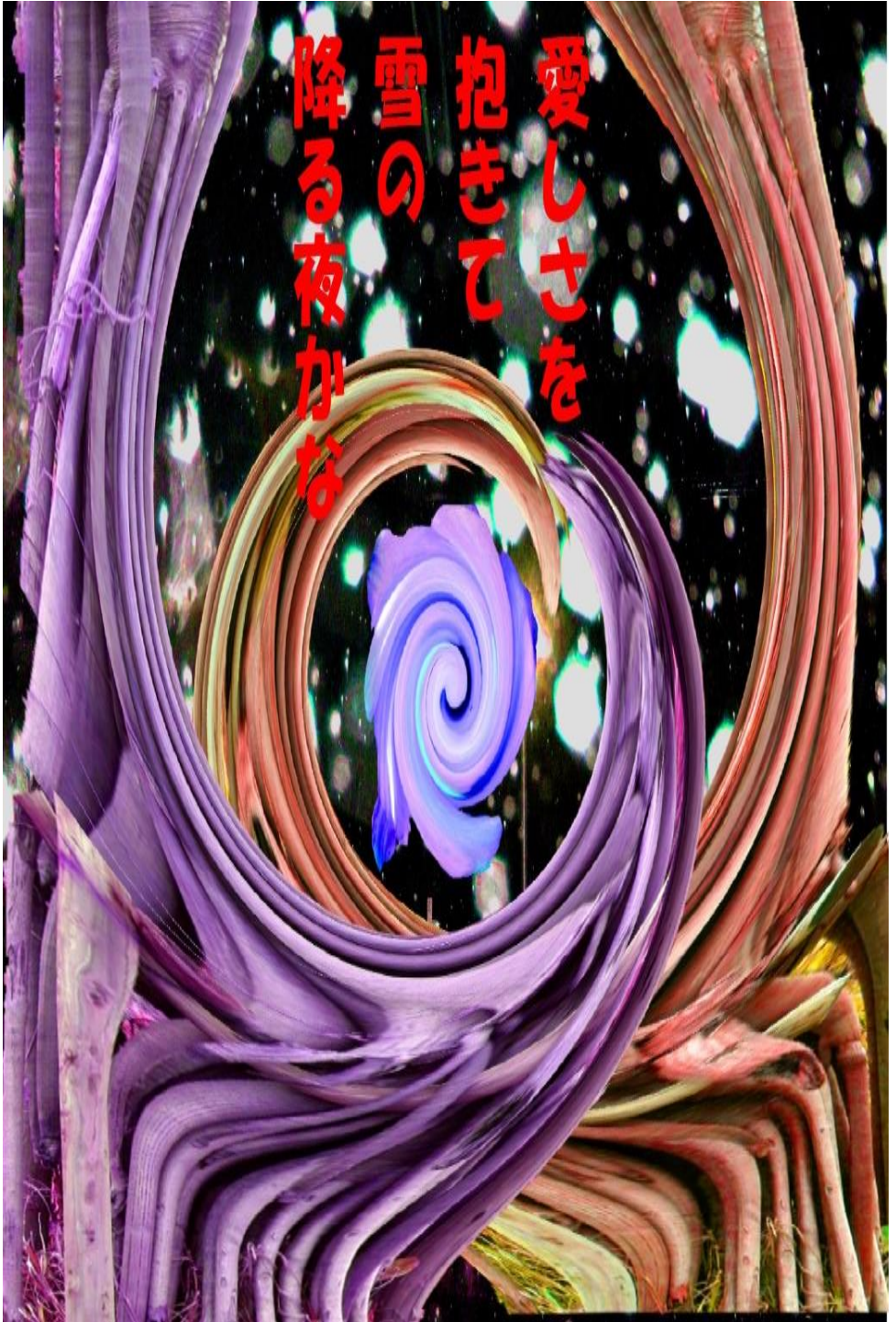
雨降らず
風吹かず
枯れ木
歌う



用まれて
心おちつく
闇の中



俺
こ
安
る
は
ら
は
に
こ
さ
あ
言
ぎ
う
と



愛しさを
抱きて
雪の
降る夜かな



ゆらゆら脳が憂鬱

今日も雨



やさしさに抱かれて眠る日はありや

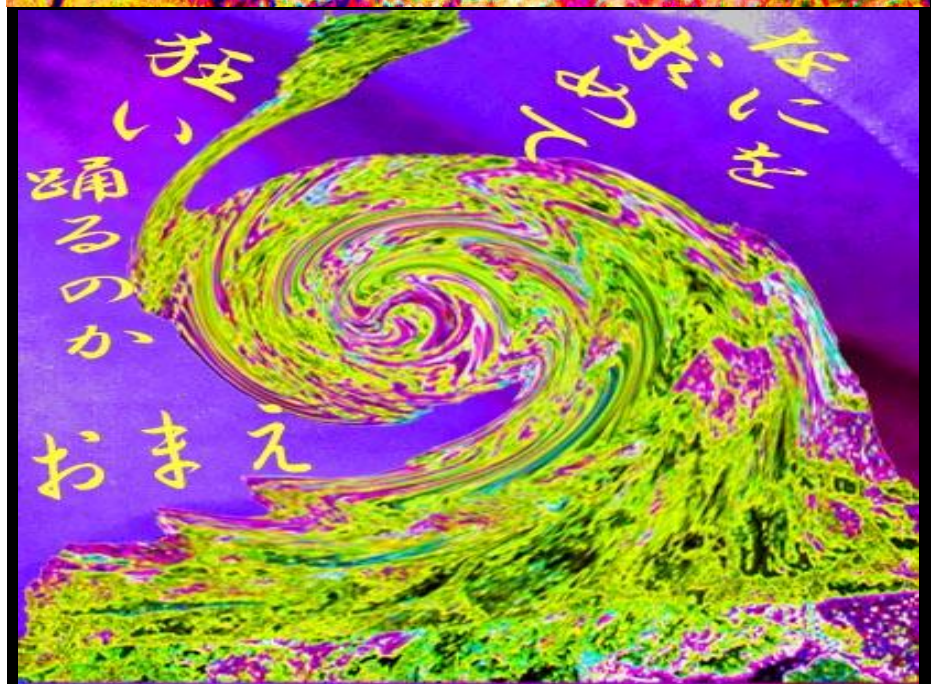
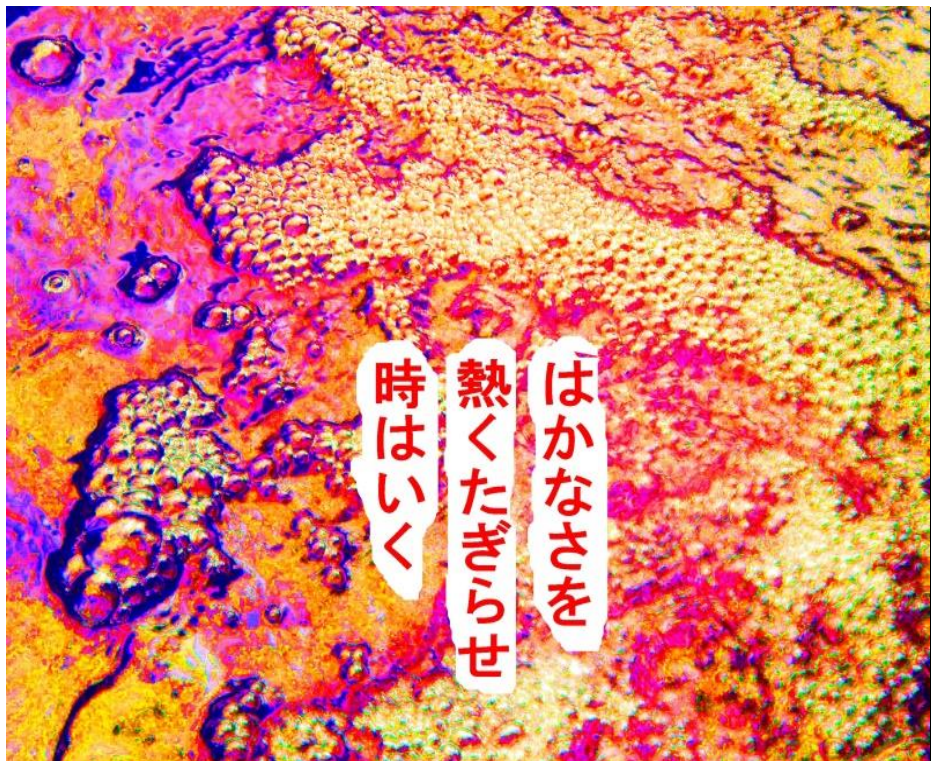
またたきの
美しきもの
しづくかな



エヘヘヘヘ

ピーピーヒヤラヒヤ

ホイホイホ





ねえちやんよ

腰を振り振り

何処へ行く

しあわせを
求め虚ろに
叫ぶかな





さびしさの

真上に浮かぶ

明けの月





われ先に
ひしめき生きる
おれ俺オレ

2022年10月発行
アートハイクおきなわ

定価1295円(消費税抜き)

編集・発行者 又吉康隆

発行所 ヒジャイ出版

〒 904-0313

沖縄県中頭郡読谷村字大湾 772-3 C-1-190

電話 098-956-1320

印刷所 印刷通販プリントバック

ISBN978-4-905100-44-7

C0093

著作 又吉康隆

1948年4月2日生まれ。沖縄県読谷村出身。

出版本

・小説

マリーの館 1380円(税抜き)

一九七一Mの死 1100円(税抜き)

ジュゴンを食べた話 1500円(税抜き)

バーデスの五日間

上巻1300円(税抜)下巻1200円(税抜)

おつかあを殺したのは俺じゃねえ1350円(税抜)

台風十八号とミサイル 1450円(税抜)

・評論

沖縄に内なる民主主義はあるか 1500円(税抜)

少女慰安婦像は韓国の恥である 1300円(税抜)

捻じ曲げられた辺野古の真実 1530円(税抜)

沖縄革新に未来はあるか 1300円(税抜)

あなたたち沖縄をもてあそぶなよ 1350円(税抜)

・季刊誌

かみつく1 1200円(税抜)

かみつく2 1500円(税抜)

かみつく3 1500円(税抜)

沖縄内なる民主主義4 600円(税抜)

沖縄内なる民主主義5 600円(税抜)

沖縄内なる民主主義6 600円(税抜)

沖縄内なる民主主義7 1500円(税抜)

沖縄内なる民主主義8 1500円(税抜)

沖縄内なる民主主義9 1400円(税抜)

沖縄内なる民主主義10 1400円(税抜)

沖縄内なる民主主義11 500円(税抜)

沖縄内なる民主主義12 1380円(税抜)

沖縄内なる民主主義13 1380円(税抜)

沖縄内なる民主主義14 1380円(税抜)

沖繩内なる民主主義 15 13800円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 16 13400円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 17 10800円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 18 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 19 13980円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 20 13980円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 21 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 22 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 23 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 24 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 25 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 26 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 27 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 28 12950円(税抜き)
 沖繩内なる民主主義 29 12950円(税抜き)

県内取次店

沖繩教販

TEL 098・868・4170

FAX 098・861・5499

本土取次店

(株)地方小出版流通センター

TEL 03・3260・0355

FAX 03・3235・618